○黄檗宗れ部

常途禪錄曰十方如來同一道ナルガ故ニ出ニ離ルニ生死ヲ一皆以ヲ直心ヲ一云云又遺ニ失シ真性ヲ一顛倒行レ事。性心失ヒレ真ヲ認メテレ物ヲ爲レ己ト。認メテレ賊爲シレ子ト。又諸法所レ生スル唯心所レ現スル一切因果世界微塵因レ心ニ爲レ体ト。又失ニ却本心ヲ一妄認メテ緣塵分別影事。又色心諸緣及心ノ所レ使ヲ諸所レ緣スレ法唯心ノ所レ現スル汝身汝心皆是妙一明真一精妙一心所レ現スレ物及認メ悟中ノ迷ヲ一晦昧シテ爲リ空。又山河虛空大地咸是妙明真心中ノ物。又汝等尚以テ緣心ヲ一聽ク法ヲ此法亦緣ノ非レ得ルニ法性ヲ一。又因レ指ニ當ニ應サニ看ルレ月ヲ若シ役タ觀指以テ爲ニ月体ト一此人豈ニ唯亡ニ失月輪ヲ一亦亡ニ其指ヲ一。又吾不レ見時何不レ見ニ吾不見ノ之處ヲ一若ノ見ニ不見ヲ一自然非ニ彼不見ノ之相一若不レ見ニ吾不見ノ之地一自然非レ物ニ云何ソ非レン汝ニ。又若能ク轉レ物ヲ則同ニ如來一身心圓明不レ動ニ道場ヲ一於ニ一毛端ニ徧能含ニ受十方國土一。又同一分妄見別一業妄見。又五陰六一入十一二一者十一八一界皆ナ本如一來一藏妙真如ノ性ノ。又清一淨本一然云一何忽チ生ニ山河大地ヲ一。又演若達多失頭狂走故事又汝雖ニ歷劫憶ニ持如來秘密妙嚴一不レ如カ一日修ニ無漏業ヲ一。又從ニ聞思修一入ニ三摩一地聞中入流亡シレ所ヲ所一入既ニ寂ノ動一靜二一相了一然不レ生ル又攝レ心ヲ爲レ戒ト因ノ戒ニ生レ定ヲ因レ定ニ發スレ慧ヲ是則名ヲ爲ニ三漏學ト一又一人發真皈スレ元ニ此十方空シケレバ皆ナ悉ク銷殞セン。又衆生迷悶背キレ覺ニ合レ塵ニ故ニ發シ塵勞ヲ一有リ世間ノ相一。又於ニ一毛端ニ現シ寶王刹ヲ一坐ニ微塵裡ニ轉シ大法輪ヲ一。又但有リ言說一都ノ無シ實義一。又將ノ此深心ヲ一奉ス塵刹ヲ一是ヲ則名ノ爲ス報佛恩ト一。

と、本日は此炎暑とも厭はず各位よく、參聽せられました、誠に此炎暑をも厭はずに、參聽せらるゝは殊勝な事である、併しながら吾人は、之と定まりある因緣と云ふものあれば、說法聽聞に參詣しやすいとは云ふ了簡がありても、來ることも出來ぬ人もあり、又假令ひ來る事が出來ても、元來佛法てふものは爺樣や婆樣を籠絡するか、本色の樣に思はれて、說法などは、之を聽くに足らぬと心得て參詣せぬ者さへあるに、各位は定日毎に、欠席なく參聽せらるゝは之と定まりたる因緣づくと云はもして、將さ何とか之と申しませうぞ、各位が此善因緣を增長せらるゝは、つまり未來好の果報と求めらるゝの資糧なるは、各位其心をて說法と聽聞せらるべし」此一段揖禮ノ言辭

宋の參政魯郡開國侯曾懷言へることあり、大佛頂首楞嚴經は是れ諸佛の法印群生の心宗なり、此印と得る者は正覺を十方に成じ、此心に迷ふ者は生死を塵劫に淪む、是を以て釋迦如來獨り此最上乘の法印と佩て、而をて世に出現し全提直指曲折開遮五十年間普く群生の心地と印し、末後再ひ洪範と垂れ重て眞慈と起す故に、阿難魔燒に遭と示すを以て、而をて啓發宣明し玉ひ、遂に首楞嚴王無見頂法乃稱あり、心見を審問をて圓通と陳辨す、勝義中の眞勝義性を宜す、是故に中に於て一と無量と爲を、寶刹を毫端に現じ無量を一と爲す、法輪を塵裏に轉す全く頓悟と彰たを、併せて權乘と銷す歸元を發揮をて如來藏に入る、以て天魔外道成く心宗を悟るに至る、無量の法門一印に印定す、謂ゆる是と無上の寶印と名くる者虛語ならざるなりと、至れる哉、此言以て此經の大綱要と見るに足るべきなり、心宗の規鑑之と棄て豈に他あらんや、此經の古來禪教諸師が拈提講述せらるゝ者は、學者辨道に最も直接痛快に心路の方針を

指示し、全提直指し曲折開遮して、現前の諸事と執て直下に指明し、或は譬喩或は方便或は因縁等皆阿難及ひ大衆とを以て久く本心と失却を以て、妄に縁塵分別の影事を認て、迷途に彷徨すると憐み之を提携して菩提妙明真性の故郷に歸らしむる訓導より外なし、參禪辨道は士は照心の家訓と爲すへきもは其れ唯此經にある歟、昔達磨大師二祖に付して曰く吾れ震旦を觀るに所有は經教惟り楞迦四巻あり、以て心を印をへしと、達磨西來の時、此經未だ西來せす、若し既に西來を以て廣布せは達磨又必す言はんとす、震旦は諸經楞嚴經十巻乃みあり、以て心と印すへきと如來、一代所說の經教皆悉く心を印するは妙法寶なり、中に就て楞嚴の如きは惟り最上乘の心印を指示を、加ふるに心路を開發するに全提直指委曲周到なるは餘經ゆ嘗て道破せざる所の者多し、故に南嶽青原馬祖百丈等は諸師は此經を以て學者照心の指南となし、經中の要語を將ち來り引は證して擧揚せられさり」

三寶義林は中に三種は三寶を出す、其中に一體三寶、同體三寶とは へるは、己身即佛法僧といふことを以て、禪門の直指人心見性成佛といふと同一なり、此地位に到れば、釋尊は達磨大師も吾人も衆生も今も昔は恭敬奉事も着衣喫飯も、凡聖一如迷悟不二は道理なれば、古人は八萬四千は法門は月を指す指の如く又門を叩くの毛孔ともいひたまへり、然らは則ち趙州乃一無字黄檗の三十棒南泉の猫兒なといへることは一超直入如來地を示をゑめ乃勝方便なるへを、誠に禪家は教外別傳不立文字向上は法門なり、教外別傳不立文字といふも維摩經に文字性離と說き法華經法師功德品に五種法師と說き瑜伽論ゆ十種法行と說きたまへるは文字の本体もと不思議

評ニ曰ク伏衆法ヲ得タリ

解脱なりと証せしむるなり、古人曰く悟る者は法華を轉ぜず迷ふ者は法華に轉せらるとこれと以て我宗は主義たる禪を以て體となし教を以て用とす乃ち自己の心性を徹見して各自に安心立命せしむるは禪に如くはなく佛法に隨順して信心堅固ならしむるは教に如くはなし故に禪と稱するは禪定は禪にはあらずして直心單傳は禪といふ即ち佛心これなり教とは佛は心要と開示せるの言詮なり佛心とは衆生は本心なれば凡そ吾人安心決定せるは我一心にあり假令ひ佛祖の言教といへども之に粘着する者は迷ひなり古德曰く佛と求むれば即ち佛魔に攝せられ祖を求むれば即ち祖魔に縛せらると然らば則ち我一心は安心は我一心に據て之を決定せるにあらざれは物に轉ぜられて迷ひとなるされば物に轉ぜられざる樣にするを悟るとはいふなり元來吾人は佛心と具足して甚だ利根な者なれ

評ニ曰ク小波瀾ヲ設ケテ多少ノ姿ヲ取ル輕妙

ども其譁といへゝ善事をせると惡事を爲せとは何方がよいかあるきかといふことは誰にならはひでも其心に知つて居る其證據は忠孝貞信な言行と見聞すると涙と流して之と敬し之を慕へとも若し奸佞邪惡の言行と見聞すれは腕を扼して之と憎み之と誹るに至るこれ即ち吾人は之と利根なる證據である然るに何ぞ我氣にいらぬか心の儘にならぬ事でもあるとは心を狂ひ出して他人の笑ふも顧みず無茶な行爲と演ずるに至らんとするは誠に愚鈍な事である一心一生は道中なれは一心ほど大事なものはない一心を以て一切に眼をつけ工夫をしてみれば隨て物事の道理が分つて來るから自ら悟れる筈である古人の狂歌に

見るとに慾とくちとでかみあふてけん〳〵するが犬はおなかまとをへて吾人は貧富苦樂のために惹起す處は煩惱妄想はみな一心

の技業であれば之がため生死は苦おみが堪へぬのである唯生死のさめは苦おみを徳と愚痴とでうみあふ斗にて安樂は境界を求むることも出来すば本来は佛心を放棄するえれなれば犬の仲間え同様であるといふが此狂歌は意なる」此一段伏案法又波瀾アリ

某初めて得庵居士に相見せし時に、佛法と申すものはいうなる物ぞと問ひ侍れば、居士答へ給はく、佛法は石鹸の如えものぞり」と某は更に其意を了し得をして、再たび居士に打向ひ何か故にか、石鹸の如えものに侍るやと問ひ返おければ、居士のたまえく世に洗粉え種々有れとも、身は垢を洗ひ去るにえ石鹸に如くえのえあらお、されば世に教法え數多あれとえ、心の垢を洗ひ去るには佛法に若くものなければなりと」某又心の垢とは何如なる者ぞと問ひ侍れは、居士のたまえく、人の心性えもと妙明にして、誠に妙に誠に明るしに、即ち真實々際なるえ乃なるを母は胎内に宿りぬるより、きたなき垢は付きうめて此世に生れ出る曉より、まを〳〵垢は上え塗りをおあげて、終にはそれ妙明なる本来の面目と全く昧まし果つるなり、是と無始無明と云ふ所謂心は垢とえ是なりと」某は曽に佛法を學びおことはなうにおかは、斯の如き懇懃なる諭言も、馬は耳に風とやらんさまにて、猶問ひけらく某は幼なき頃に孔子は道と信おて、心お惡し、と思ふことは身お行えぬやうに慎みつゝ居れは心の上にはたなき垢の付きたにおとも覺に侍らす、されば佛法は修するに及ふまじきおやと申ければ、居士笑て問ひ給はく子は何時頃生れて何處に在るやと、某答へけらく某は何年何月に生れて、今此處に在りや」是時居士聲を勵まおてはさまはく、生れもせぬもはを、生きたと思ひ、在にもせぬものを在りと思ふこれ

大なる心は垢なり、この心の垢が汝か妙明なる心性と抹刷し去るが故に利害得失おきに、利害得失を計ち、生老病死なれば、生老病死と感ち、汝が心境を錯亂し、汝が行事と顛倒することを、皆これ垢の所作なり、佛法は法水を以て流ひ去るにあらざれば、いづくんぞ斯の如き大垢を去り盡ちく、本の洒々落々さる、妙明心地に復をることと得んやと」某若し上機大根の者ならんには此一言にても悟りぬへきと却てこれに驚きて暫ちは茫然と ちて自失せり」や、ありて又問ひけらく、某はこれまで佛法を學べる者に交りちに、いづれも佛法具くてゐと〳〵うるさくこそ覺ゆれ、彼等みな佛法乃法水と以て、心の垢と洗ひ落ちさる人ならんに、かゝる具氣は甚ちれ、いかなる譯の侍るにかあらん、これ理を聞ち給ひぬと乞ひ侍るければ、居士は答さまたく佛法を修するにも人によりてさま〳〵なり、石鹼と以て心の垢と洗ひ落さんとえせて、却て石鹼の汁と垢は上に塗を加へさる人えあるへし、うゝる人は佛法と修してなか〳〵に穢れぬるえのう、又石鹼にて心は垢は落ちたりとえ、石鹼は汁染み付きて垢の如くになれるもあるへち、所謂佛法具き人とは、是等のたぐひにやあらん、本来清淨の身より云へば、石鹼の具さへやがて垢は一種なれば、其は清水にを能々洗ひ落すへし、かく洗ひ落しても、猶濕氣の存するものそ、其濕氣もなほ垢の一種なれは手拭と以て能々拭ひ取るへち、斯く洗ひ去を拭ひ来りて清淨潔白の極に至りてこそ、始めて本来の面目とは云ぬへけれ、佛法も修ちてこゝに至らざれば、猶一種の垢にして具をえうるをもありぬへしと、誨へさせ給ひりといふ総して吾人が様は境界まなれば此身の大安樂大安心なることと奈何ぞや吾人もの様は境界丹なりたさえ

のなり」此一段類喩法

我宗は元来禪門よりして見性成佛を談すれども、又念佛往生をも說くなり、これは一文不知の人々よ、往生淨土の勝因を知らしめんが爲めである、大無量壽經四十八願の第十八願目に設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗正法とある、此の意は何處も世界の衆生なりとも至心に、我此極樂に生れんと信じ樂ひて一返なり二返なり南無阿彌陀佛と稱ふる者は必らず我此極樂へ生れさせすには置かぬ、唯父と弑し母と弑し佛を傷け羅漢と弑し僧は和合と破らしめさる者と佛は正法と誹りたる者をば、此中のら除くろと云ふの意じや、偖又此願は成就せし姿を後ゐ說せられて、諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心回向即得往生住不退轉とある、此御文で各々在家乃老若男女まで、皆一

評ニ曰ク名僧知識ノ口吻描キ出シテ宛然

念は往生を遂らるゝことが確と決定してあることじや、聞其名号と云ふは、阿彌陀如来は御名号即ち南無阿彌陀佛と云ふれ六字は如何なる言かと、尋ぬるに陀彌陀如来が十劫の昔と云て、遠い〳〵前の世に濁惡末世の老若男女が、戒も持てず坐禪も出来ず、朝夕衣食住に追廻され、三毒五欲に引纏れて、出離のあてなき悲き衆生を救ひ取らんとのお誓にて、兆載永劫の長ひ間、御修行なさきて遂に御成就なされゐ南無阿彌陀佛は六字なれば、此御名号は我等が生死出離の爲に御成就なされたは早や十劫の昔あやゐそよ、偖は我等が如き三毒五欲の衰あさ身でも、三學修行をる世話もなく、此世れ命の盡るとき、心らず極樂へ往くことよと唯一向に如来様の御本願に任せたてまつると、其有難さが身にあまりて思はず知らず南無阿彌陀佛と稱ふる一念それ一念に信も行も具足まで直に不

退轉とも最早や跡へも一分も戻らぬ位に入り此身此儘定聚れ數まる入ると云て極樂世界れ菩薩れ數まる加えり一生補處の菩薩方と同し位まる昇るのじや此ありかたき御思召に取縋りて安心を決定するが我宗他力往生の極意てある」此一段此篇の關鍵

昔ま高倉れ宮、謀反の時、源三位頼政を率ゐて、三井寺へ奔られしに、頼政の家人に競瀧口といふ渡邊黨れ老臣ありしが、これ時に際まて、俄かに主人れ手と離れ、敵方れ大將宗盛れ方へ降參せしま、頼政少まえ之を怪まず、競は然る二心ある者に非ざれば、必らず不日に歸まを来るならんや言えれしが、果まて宗盛の愛養せる、南瘡と名けたる、名馬と盜み来り、頼政ゐ呈せしとかや、是の頼政の胥つて怪まざりしもれは偏へに内心決定まて競れ忠良なるを信ずればなま然るに今れ念佛行者ま彌陀佛勅の招喚微妙不可思議れ本願と信仰決定する事を知らす種々さま〳〵の疑慮を懷き或ひい現世の祈まを迷ひ或ひいこの淺間まき罪惡の凡夫が何とて一念の決定に報土往生を遂げ得べきや等と法を疑がひ機を疑えふれあるを是れ錐刀れ利と知るも未だ鑿刀れ利を知らざるえのにして唯己れれ妄念の重きと知りて未だ如来れ慈悲の深きと知らを憐愍れ至まに堪へざるなり」此一段因緣又擒縱法

評曰、因以波瀾激躍ルシテ舉ケ再起ス言辭ヲ以テ緣ニ曰ク鋒舌ヲ視ルニ

評曰、辭盡ス意盡テ何等ノ老手筆

泉南の佛在庵主義諦師曰、唯此一心即ち是れ佛おり、佛と衆生と更に別異なま、但是れ衆生相まを著〳〵て外に求む、之と求むまは轉さ失なば、佛をまを佛を求め、心と將て心を捉へえ、窮劫に形状盡すも終まを得ること能えすと、善い哉此言や、一心れ差排及運用、誠まを大切なり、吾人豈に之を忽せまを可ならんや、吾人常ゐ此一心を祗礪まて、以て一言一行に眼と着け、本来れ面目を悟了まを、若まく

た往生浄土の勝因を、累積せんではなりますまい（此處收束）（茲に於て回向して降座し本尊に三拜を説教師に入るべき）

評ニ曰ク陽ニ聽衆ヲ警誡シテ陰ニ揖讓ノ語氣ヲ包藏スル何等ノ辯才ヲ敬服々々

○浮土宗の部

無量壽經ニ曰ク我建ニ超世願ヲ必至ニ無上道ニ此願不ニ滿足セ誓ヲ不ト成ニ正覺ヲ。

昔し孟子といふ人は性みな善なれども教れ好らぬよりして惡き者になると又荀卿は性えみな惡なれども教によりて善と化する者なり故に教と受さる者はみな必らず惡き人とならさる者はなしといえれさが誠にこれえ格言である、今各位は此格言と服膺ちてみられよ、説教を聽聞するに仇や愚かな了簡て之と聽聞ちたとて、何の益にもならぬ事なきとえ、若ち心を入れ思ひを潜めて之と聽聞したならば、各位を利する事は幾許そや此世一生涯善人と呼れ聖人を稱せらるゝはうそでなくちて未来も結構な果報と受て安樂か出来るれてあるが若しえ、之に反ちて此世て惡人をいえれ、奸人と名けらるゝ者は一生涯慘憺さる憂患とをるえかりてなく、かて、加へて来世にまても六道の辻にさまよむ、地獄の鬼に責めらるゝ乃苦厄と被らんとを、何と恐れて且最も懼るへきの話ってえなさか、然らえ則ち各位え、説教を聽聞するに方て其心して之を聽了せらるへし（此一段揖禮）

さて賛題に提出ちさ御言葉の意を按をるに、彌陀本願に一切諸佛に超過すと云ふの義にして、是れ則ち四十八願俱に諸佛に超勝をると云ふのみ、故に同經次下の文に云く無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能及又曰く清淨莊嚴超踰十方一切世界等とあると

以て知るへき、然るに之に就て最とも不審なるは、夫れ諸佛も教理行果平等にして差別なのるへき、何と以てか彌陀れ本願のみ、獨り超過を論することを得へけんやと云ふ事在り、然れども諸佛れ悉願と發したまふことゐ固より平等にして証果も亦た二なかるへしと雖も、其別願を因地に唱へ、利益を果上に施こそ事至ても、固より因緣差別なき事あらす、故に善導大師云く、諸佛れ所証は平等にきて、是れ一なれども願行を以て来し攝むるゐ因緣なたにあらすや、又南岳大師ゐ常同、常別の二門を以て之と決判したまへり、余試みに之と斷きて曰く、蓋き諸佛は各〳〵一方に在りてろの所被の機熟を監がみ各〳〵別願を發したまふが故に譬へも武藝者の弓を能くし、力を能く〳〵俱に第一と云ふが如き、諸佛もまたそろ所化の機に對して、共に超過と云ふへきなり、然るに彌陀の本願れ如きも、彼の荊溪大師れ說の如く、此の娑婆世界の衆生ゐおゐて因緣最とも深厚なるゐ故に、此土に在りては彌陀の本願獨り超過とゐふへきなりと、されば吾人は、彌陀れ本願獨り一切諸佛に超絶をる所以を信じて念佛を申すへし、凡そ天地乃間に住をるもの一せしも日月の御惠みを受けさる者なき、日月なくは五穀生ぜす萬物熟せす、中に就て人の命は一日も繫ぎ難き、古より五穀の事を菩薩とゐひ、司食する者を菩薩と云ふ、是も皆天竺の詞にて人を救ふと云ふ義に取りしなり、五穀は夏冬より生を、夏冬も寒暖なり、寒暖は水火なり水火も陰陽なり、陰陽ゐ日月なり、日月とも須彌四域經ゐ日輪月輪も觀音勢至れ二菩薩の、世界衆生と憐れみて照臨きさまゐ所なりとあれば、其成熟の本に溯上りて五穀の事と菩薩とゐひき にや、觀音勢至も本是れ彌陀同体れ慈悲智惠の分身なれは、此世に

生れ日月れ光照を蒙ると、五穀と食ふ程乃者は、皆これ阿彌陀如来の御慈悲食をるも同じ理なれば、命をつなく大恩と思ち、一日片時たりとも念佛せずして可ならんや、白樂天に此婆婆界へ生れ来る衆生悲喜の度毎ま、口とひらきて南無阿彌陀佛〳〵と唱ふれは、偏へに極樂れ阿彌陀如来と因緣あつき驗なりとゆへ、寶ま生々世々の慈悲と母とも此佛なれ、毎朝毎夕ふ香花燈明とさ、げて禮拜ま、日々三度乃配膳ま向ひ十遍なりと百遍なりと唱へなば、現世ま福壽増長、子孫繁昌し、未来も必ず一蓮託生極樂の往生と得て長く悟りの契りと結ぶころ樂のもしけれ、天台大師觀心食法に曰く、三寶を供養し然して後ま此食を受く、夫れ食は衆生れ外命若ま觀に入らざれば即ち生死と潤さん、若ま能く觀ま入ることを知らは生死の有邊無邊と分別せんと云々、又淨名經に曰く食ま於て等し

評曰此一段諄々然聲色ヲ厲マサズ鉾鋩ヲ露サズ而モ其中ニ確トシテ犯スカラサル勢可アリ

犯者ハ法に於ても亦ま等しと、是を明証とは、此食を以て最若の食と成ま て能く法身と養ふ、法身立つことと得ば即ち解脱を得る是然三德をす云々、食を粗略まする者を今日存すと雖ども明けんまで保ち難し、是日既に過ぎぬれば命もまさ隨て減を、少水の魚の如し、斯に何れ樂ふかあらん、死門歩に隨て進む前路幽暗なり、爲ることなくして空ま く死せば、後ま悔るとも何の益かあらん、食の一事まても此の如ま、其他一切の事皆彌陀の御恩にあらざるはなま

誰ま念佛せざらんや（此一段煎綵法あり觀染法あり共に是れ着々言路を四滑にするの策たり）

我宗の意は難行、易行れ二道を立て一代經と分判す難行道とゆふは此土入証得果自力修人乃道なり、易行道といふは捨身他土往生極樂の道なり、上来の各宗大小權、實、顯、密、教、禪ことゆりと雖もみな難行道なり、この二道の分別は龍樹菩薩の十住毘婆沙論よ

評ニ曰ク比喩適切

ヲ出たヲ、難行道といふは五濁れ世無佛の時におゐて阿毘跋地ともとむると難しとす。さとへは陸地の歩行はすなわち苦おきが如し易行道といふはさ、信佛の因緣をもて淨土に往生せんと願ずれば佛願力に乘おてすなわちかの清淨れ國土に往生をるなりこれとたとへば水路の乘船れすなわち樂しきが如しと聖淨二門と分別すれは聖道の諸門ハ聖者の修行にかなひ、念佛の一行は凡夫の所修に應せること異論あるべからず、然れは末代の衆生、彌陀佛を念して易行他力に歸せんことと決定出離れ要道たるべきえのなり、自力門に於てハ萬法と一心ニ歸して自己本來の光明を大千沙界ニ蒙らしむるに在り、然るに我宗門れ安心ハ全く之に反し萬法を一境に歸して、佛光明に大千沙界と照さるゝなヲ、故に彼れを自力心を一點も起すへからをと云ひ、此れは他力心と一點も起すへらすと云

ふ、我れハ唯、信以て入ヲ、彼れハ唯、疑以て入る、我れハ智と隱おヲ唯悲と手段となし、彼れハ悲と隱して唯智を手段をなす、其法總て反對の點に在るゝ故ニ、能く其意を得て我宗門れ信者ハ、念佛の勝因と累積せらるへし仰も彌陀の本願の如きは、布施持戒、忍辱禪定、波羅密等の所謂る、萬善萬行を御修行遊ばされて、無量の煩惱と斷おヲ盡おて躰の德と名に即すると有て、其れ御修行の功德を取り堅めて、南無阿彌陀佛と御成就遊ばされたに依て、諸佛超過の本願と申おます、故に萬善萬行れ功能、六字の中にこもつて有るが故ニ、散亂麁動れ者が唱へても、煩惱業消と滅し、慳貪邪見の人が申しても、滅罪生善乃御利益を蒙り、末代惡世の今日の我等が唱へても、生死他劫の罪と滅おヲ大往生を遂ぐる、、、、、（以上譬喩）

昔し一居士あり某和上ヲ問ふて曰く、新田義貞は忠義の爲ニ打死

浄土宗ニ鎮西ト別ス

西山ノ鎮西ハ白流ニアリ名越ニアリ

一ハ多念ヲ談ス一ハ一念ニ成ス

西山ノ一念ハ多念ニ成ル

西山ノ一念ハ業成ニシテ成ル

三心ト三心ハ一心ニシテ

本願ハ念佛ニシテ

念佛ノ玄妙ハ得証ニアリ

三心ノ名号ハ報ニ

願ハ土ノ因ニ

入土ノ方便ハ能ク

難ノ機類ニ

唯念佛ヲ以テ

撫化ノ

法ヲ

去、曾我十郎は孝行の爲に戰かい、死して共に修羅道の苦患をうけしことを諸記に見へさり、其虚實乃如きは今且らく之を措き、其理を推求して之を思察するに、忠義の爲に戰場に臨み、骸を原野に晒して顧みざるは、是武臣の常なるのみ、然るに若し戰のつて死せるが爲に、修羅の苦患を免がれしとならば、乃はち佛法は決して武臣の信ずべき所にあらざるなり、然れとも更に頭を廻らして古今の史傳を考へるに、良將名臣の深く佛法を信じ、碩學德望なる高僧に師とする事へるも亦た頗ぶる多し、此を思ひ彼を思へば、一抹の疑雲頭邊に遮ぎり来りて、其理の在る所を辨知せしめざるもあり請ふ師審らかに開示せよと、和上欣然として善哉と稱し、乃はち之に示して曰く、夫れ忠孝を人道の至極にして、天道に生ずるも勝因たる、然れは法苑珠林に見よ忠孝を盡すもの浄土を願へは、忠孝の功德また以て往生浄土の正因となるべき旨、正しく聖教を引證して詳らかに之を記せり、蓋し義貞の忠誠なる、十郎の孝行ある俱に人道の極を盡して爲に身命を、刀刃の下に喜捨せしも、是も真に忠臣孝子の尤もけなるものなれは、必すや生を天乘人間の間に受けて、高貴福德の果報を感得すべき筈なるに、却つて修羅の苦患を受たるものは是れ他なし其死に臨むの時に當り、讐を怨み敵を憤とふるの念は嘗て父を慕ひ君を思ふの情よりも烈しく、嗔恚の心は忠孝の志ざしよりも強かりしが故に嗔恚の業に引れて、先づ修羅道を墮在するも、其報盡くれば更に復た忠孝の果報を受けて、天上人間に生するを毫も疑がふべきの非ざるなり」（此一段一則の談話を引用し來りて以て因緣を示す全篇と震動せしむ）

此の如く說き來れる、諸佛の冥鑑もまさに恐るべきあらやを、既に

評ニ曰ク叡結萬鈞ノ力アリ

諸佛の冥鑑恐るべくんば此恐るべき冥鑑と勿体なくも之を暗まして惡事をなすを得べけんや務めて善事となして諸佛の御心に副ふこそ誠に吾人の本懷なるべし殊に我宗の信者は、万法を一境に歸して佛光明に照さるゝものなれば信心以て念佛は勝因と累積ねばならぬ道理である、下根下劣の凡夫と、平等一致に我子の如く思召往生させんが爲、大願を立て玉へば今日の凡夫が浄土へ生せすんば、我れも又佛けに成まいと誓ひ玉へば彌々本願を仰ひて願行相續、、、」叡結「此處にて十念を授與し壇を下りて本尊の前に三拜し呪願回向等隨時不定」

○浄土宗之二

無量壽經ニ曰ク設ヒ我得レモ佛ヲ。十方衆生至心信樂欲レ生セント我國ニ。乃至十念シテ若シ不レ生ズ者アラバ不レ取ラ正覺ヲ。唯ダ除ク五逆誹謗正法ヲ。

意外の群參惑いをさり、熟〳〵と世間の狀態を察するに、凡そ人と生れて貧賤なるもれあり、富貴なるものありて、現在の果報、其種類、幾ばくなると知なざれども、其果報の善惡は唯勉強と、不勉強との二箇れ原因に、依ることなれば、よゝや貧賤の家に生れ、又は富貴れ家に生れながら零落ゐて、貧賤となればとて、前生の宿業と現世の怠惰とに依れる自業自得なれば、誰を恨み怨むべき樣ゑなれ、我れと我が貧賤れ依はて、來れる基と能く推ゐ考へて、冥妄の雲に隔てられ、愚痴の闇に蔽れぬ樣に、注意せられ、成丈善良なる事と提撕ゐ、後生菩提れ爲にも、勉強致さねばならぬ、畢竟今日れ大臣其他貴顯と雖どゑ、多年國事に奔走して、政務に勉強されたる結果に、歴々たる高位高官ゐも居られ、其他國々ゐ一代の豪

評ニ曰ク此處此金口ヲ引來テ先ツ聽衆ヲ敬誠ス言苟モセス

商、或は豪農を指を折らる丶人と雖ども、皆勉強を以へる、一箇の因縁によりて、斯く立身出世したるなり、今日拙僧ヵ務えて、勉強と不勉強との話をするは外の譯てはなく、各位は幸はひに受け難き人身を受け、逢ひ難き此佛法に逢ひ、剰さへ末法万年餘經悉滅彌陀一經利物偏增の時に生れ逢ひたればこそ、安心安坐して朝夕念佛を唱ふることが出來る、されば今日此時を除ひては、現當二世の大願も何れの世にか、成じ果つべき、縱ひ一句一偈の法門なりとは、善知識の教師に逢ひ說法を聽聞して、信力堅固勇猛精進にしま未來永劫の後を待すも、一生の間に、前世無始遠々劫來の罪障を消滅して、此世で往生極樂の大願を、満足致さねばなるましきぞ」

此一段揖禮

前の贊題に提出した金口は、無量壽經四十八願の第十八願目に御說なされた、金口であつて、此意は何處の國の衆生でも、至心に我極樂國に生れんと信じ樂ひて、念佛する者なれば、必ず之を我極樂國へ生れさせずには置ぬ、但道に反し理に背きたる惡逆の事を爲したる者は、此中よりして之を除くとの意である、此願の成就せし姿を垂示せられて諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向即得往生住不退轉とあるので、今日濁惡末世に生息する吾人が朝な夕なに衣食に追廻され、煩惱邪見に繫縛され、淺ましき處の衆生と雖ども、彌陀の本願名号の念佛さへ申せば往生極樂の妙果を得ることが出來るなり」此一段次段を呼び次段此段に應す

我宗祖圓光大師は一枚起請文に唐我朝の諸の智者達の沙汰し申さる丶、觀念の念にもあらず又學問して念のこころを悟りて申す念佛にもあらず、ただ往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申せば疑ひなく

往生するそと思ひとりて申をほかまた別れ子細候たすたゞし三心四修なんど申すこゝの候た皆な決定まて南無阿彌陀佛にゑ往生するそとれもふうちまこもゑ候なりこのほかゐ與ふゐ知ことを存せた二尊の憐にたつれ本願まもれ候べし念佛と信せん人たさとひ一代れ法門を能々學すとも一文不知れ愚鈍れ身まなして尼入道の無知ゐ輩ゐ同まて智者れ振舞と樂すして唯一向に念佛すべまを浄土宗の安心起行ゐ一紙まを至極樂ゑ源空か所存此外まを全く別義を存樂すと」三心とは至誠心と深心と回向發願心とこれなり、一まを至誠心と云ふゐ、誠とまを往生せんと思ひとりて念佛を申すなゑ、二ゐ深心と云ふた、我身は罪惡生死れ凡夫なり、然るに彌陀の本願の忝なさまよりて此念佛より外に我身れ助かるへきことなまと、堅く信すると申をなり、三に回向發願心といふは、只一筋まを極樂に參らんする爲の念佛なりと思ふをいふなり、之と要するに、阿彌陀如来は兆載永劫五劫思惟の御修行なされて、御成就なされさ、南無阿彌陀佛の、名号れ謂れを最ゑありがたく、之を信心歡喜して念佛と申せは申を程其何りがたさか身まあまりて思たす知らす信心歡喜も增てくるまて又一遍の念佛まも信心歡喜より出た念佛なれば此中まを信ゑ行も具足まて居るゝら此修力と積みて之を回向すれば無論往生極樂の素懷と遂ぐるに至るへき道理である箇樣にやを〳〵と、往生極樂れ大事が決定するに至るも、全く釋迦如来が吾人の衰れ淺ままき有樣を見うなた、吾人をして生死と出離せしめんがさめまを、彌陀本願の謂れを御垂示くだされたまばこそ、多念業成往生極樂の安心をも、戴くことが出来るのであれた、其御恩れ深さこと海も及ばす、併し之と末世の今日まて御傳へくたされ〜ゑ、三國傳

評曰 才敏捷 ノ辨

評ニ曰ク幹旋最モ力アリ

燈の各祖師は御恩なるは勿論、就中我宗祖圓光大師は御苦勞なる下し置れたれたころ、各位も今日此座て説教と聽聞をることか出来るなきは、佛祖の御恩德は、身と粉にしても、お報ひ申さまはならぬ道理なやう、其御恩報ぜとて、別ま六かぜき事でもない、各々其身相當に出来るたけ丈志ざしと盡すまては事て、吾人は間柄でも恩と報するまは、其恩と受さ人は喜ぶ様にをるか肝賢、さきの人か酒すきならば、手造りの濁酒でも真心を持て行けば、喜ぶは、甘い物すきな、人ては、同し道理、ぜうらば今我大恩うけた佛祖は、何と一番おすにて如何かることと喜こはせたまふうと尋ぬるに、佛祖の御意は唯我々衆生ぅ、惡ぃ事とせぬ様に、少ぜづゝも善事と勤めて、佛祖を信仰をる心と發し其機根相當ま迷を除き悟を開く様まかれかしと、思ぜ召す御慈悲は外ぇさら〳〵なけれは、是より外に佛祖へ對し御恩報ぜまま、たてまつる物おきことと能々合点せねはならぬ、偖ては往生の大事こそ、易々と決定ぜたれ、廣大慈恩のたえまは中々六ぅ數ことうなと、思ふ人もあるのぜらぬか、決ぜて六か數こととでいなぃ往生は大事決定は後を寐ては起ても佛は光明に照されて居る此身なきば晝夜心ろふは助け玉へ と思ひ、口に南むあみた佛〳〵申せよ唱へよ、古德の歌ま

評ニ曰ク顯照

「ひたるさと寒さと戀とくらふれは、はけかぜなからひたるをを
ます」

依て此は婆婆世界ま命のある内は衣食住と求むるはじや身體が達者になけきば佛祖の御用が勤まらぬふ依て病の起らぬ様にせよ商賣繁昌せねは佛祖の御用に差支も起ると故隨分正直に勉強せよ惡ぃ事は佛祖がお嫌ひ大恩ある光明の中て何は惡い事が出来やすぞ

評ニ曰ク暗照

親子夫婦れ中睦ましく兄弟縁者朋友乃信義あつきなどたいふまでもなけれど別して親れ恩れ大切なといふ事及國家ゐ盡すの義務の大切なといふ事を知らねはならぬ之を以て宗祖圓光大師た衣食住れ三つた念佛れ助業なり三途へ返るへき身とだにも捨て難き れは顧みはくゝむぞかしまして往生程の大事と勵ま念佛申さん身をばいかにもノ〳〵はくゝみ助くべき若き念佛の助業と思はすして身と貪求するは三惡道の業となる極樂往生れ念佛申さんが爲に自身と貪求するは往生れ助業となるべきなり萬事如此と」此一段小収束又轉換法

凡そ吾人は一國と建立して此ヨ栖息き父母ありて此ヨ生を受け、家内の和合と圖ま、一家乃繁榮を冀ふ、念慮何るは、人々一般の通情なま、而して社會ヨ秩序あま、國家ヨ法律あるか故に、またよく吾人は權利と保全き、幸福と享有きて、安穩に生活き、出離解脫ま

評ニ曰ク反映法

大法をも拜聽して以て、往生れ大事をゑ、決定すること と得きとも若き一朝國家の亂ゐ遭ひ人民困窮して其生を安んずること能たざるの不幸ゐ陷らば誰かまた衣食住を經營することと能くまる者ぞ若し往生の助業たる衣食住の經營すら尚ほ且つ之と能くまる者なくんば出離解脫れ大法實ヨ地ヨ落んのみ事若き茲に至らは國家た幾んと暗黑世界たらんがみ噫思ふて此に至れた未た曾て戰々とき く肌粟を生ぜすんはあらさる也然らゝ則ち吾人た國家れ爲ヨ義務と盡すれ大切なることと知らざる可らす、今夫れ國と愛するの心を以て、之と將來にれんはかるときは、彼の外部よま逼迫き來る災害、即ち敵國侵襲れ患ゐ如きた未く甚た意とするに足らすと雖ども、此ヨ内部より生するれ患難、即ち國計窮乏等れ害ヨ至てた、實に恐るべきの甚たしき者あま、近く之を一個の身上ヨ響へん

評ニ曰ク啃應

に創痍毀傷に災害の外部より来るものにして、疾病疫羸に患難の内部より生ずる者なり、然るに創痍毀傷に死をる者は甚だ稀にして、疾病疫羸に斃るゝ者は、恒に多きに居るに非ずや、夫れ内に患難あらしめは外に災害なしと雖ども、固より憂ふべきとなす、況や内に患難多き者は災害恒に外より之に乗するをや、戰鬪爭亂は是き一國に創痍毀傷にして、災害は外部より来る者なり、商工農業の凋衰して邦國は日に貧弱に赴くは、是れ一國の疾病疫羸にして、患難の内部より生ずる者なり、古より戰亂に因て一時邦國の衰替を致すものなきに非すと雖ども、其商工農業さに凋衰廢滅するに至らさるときは、之と恢復するあと亦さ敢て難からざる也」此一段収前引後の伏線

我國は未た外國交際あらざる當時に於ては貧富ともに、唯我國内を往来するのみにして、甲富み乙貧しく丙斃れ丁起るも共に、我々同肥中に出ることなれは、一國は上より之を見れは、曾て國の貧富を増減をることあらさりしを、外國交際をてに開くるの今日に於ては、其有様大に之に異なり、今に逮ひて早く之か計策をなさゝれは、邦國は利源ことゝく外國商人の手に落ちて、我國の富は総て海外に飛散し去るに至るべきは、掌ろと視るゝ如きものなり、何と歎息の次第ではなきの、試に今我國の景狀を概視をるに今を距ること廿年前、國家兵亂の時にあたり、兵器戰具を洋制に仰ぎしより、日に月に外國品を需用するは風習を醸成し、我乃彼に求むる所は者唯學術技藝の以て國力を培養し富強を増益をる者に止まらすして、遂に玩具不急の物品に及ひ、年を經ること愈〳〵久しけれは、外品は輸入をること愈〳〵甚しく、今我國人民は衣食住器は上に就て、子細に點檢し去れは、其帽其服其傘其履其襯衣等に至るま

評ニ曰ク措辭流麗着意新奇

て、其外國品に係らさる者ハ幾と稀に、自己一身の軀躰の外は又一の日本品と稱しべきなきに至れり、又假令外國品と用ふること此の如きに至らさる者と雖どもハ、二三乃外品を其身に携帶せざる者に至ても我々の甚さ稀に見る所なり、況や時好流轉れ速ゥなる、山村僻邑と雖ども少しく餘財有る者は、相競ふて輸入品を用ゆざるハれなゥらんとを、若ハ夫れ一國人民れ好欲をハて、永く斯の轍を改むることなく、外國品れ輸入とハて歳毎に超過を加へハハは、我國の商工將た何と以て其業と盛んにし、其技藝を長し、其資財と殖すると得べキんや、然らは則ち我國商工とハて其業を盛んならしめんと欲ハハ、先づ我國人民をして斷然彼れ外國輸入品を需用することなく、一切れ器物成るへくさけ、我國商工乃手に成れる者を購求消費せしむるより急なるはあらさるなり、今ろれ外國より輸

評ニ曰ク談甚ダ剴切

入せハる物品を視るに我國商工れ手と以て之と摸造し得るは勿論、其價れ低昂も彼と競爭するに足るの物品甚た多々、殊に我國の製造品には船賃及海關稅海上保險所等を要せざるゥ故に、吾人此國れために努ゑて之と購求ハて、成るべく、外國品と消費せすんば、內國の商工は其技を精錬し、自ら其販路も擴りて、忽ち彼と壓倒ハ、更に我國の製造品を彼乃海外諸國へ輸出せハむるに至るハ、敢て難き事でハない然るに事此に反し外國の事物ぞさへいハゝ其利害得失と問はずして一ハ二ハみな盡く之と用ひ之と求むれハ遂ふは先祖代々結緣の淺からさる最勝無二の佛教を棄て、造化戲論の外道を信じ其結局將さに三途に沈み未來永劫の苦報と受けんとする者あるに至らんとす豈に淺ましき事れ限ゑならすや故に此國を愛する志しある者ハ努ゑて我國製造れ物品と購求し成るべく外國

評ニ曰ク凄婉悲涼

品を消費せさる様にすべきこれ實に人々國家に爲えに盡さの義務なり大師の仰せられたる念佛の助業ともいふべき衣食住を經營するの一端なり又極樂往生に助業たる念佛申さんかたえ自身と貪求するにも宜きく應さに此れ如くならさるべからさる次第ではなさか」此一段關鎖法あり抑揚法あり波瀾あり讀者輕々に看過すること勿れ

此の如く心得て常に間がな透がな念佛を唱れは必ず其利益あるや得て之と知るべきなり、昔し宋に魏世子ゥ嬢も十四年にして往生と遂げ、唐の惟岸の童子は惟岸に往生と伴せんとて即時に端坐きて化し、明の袁中郎が娘は十四年ふして淨土と感見きて往生し、吾朝に喜庵か子波八歳にして念佛往生し、后に母とも誘引きて往生を遂させたり、興福寺の古羊童も若齡にて往生の素懷を遂けし事に諸書に散見せり、又昔きに天笠の毘舎離國に惡病にやりて死する者數を知らず、月蓋長者これと悲きみて、釋迦如来に救ひの法を尋ねければ、如来教へて西方にむかひて彌陀の名号を唱へーむ、其時長者家に還りて、教に如く念佛を修行ぎしに、西方の三尊たちまち、虚空に来現きて大光明を放ちたまへは、國中の病人一時に平愈しさる吉請觀音經に見へたり、又雜阿含經に釋尊に俗弟子須達長者に、懷姙の女人を見ては、必らす三歸と授けて唱へーむとゆへり、大集經にも姙婦宜きく三歸を受くへ旨を明せて、三歸と受けし人にに三十六億の善神ありて守りたまふ故に、其産甚た易し、今念佛に三歸の初の歸依佛なり、是故に懷姙の女人只管念佛と修行せば諸天善神に加護厚く勝れさる故、平産の祈禱にきて生る、子、又無病長命なるべし、之れに依りて我大師も九條殿下の政所へ進せらるゝ御文に公達なんどの現世御祈の御料ふに念佛が目出度

評ニ曰ク才辯說教ノ上

事、傳教大師は七難即滅の法も念佛を出したまへる凡う現世后世の祈り何事か念佛まさずんやとれたまへる嗟呼大なる哉念佛の功德當ふ極樂往生は助業のみならず現世安穩は利益あらんとは誠に佛智不思議の靈妙といふべしなり」此一段因緣

評ニ曰ク四活自由ニ收束ス敬服々々

之を要するに、佛祖の御意は唯我々が惡い事とせぬ樣ま、少しづゝ善事と勤めて、佛祖を信ずる心を起さ、迷を除き悟を開く樣まなれかしと、思し召す御慈悲は外に、さら〳〵なけれを我々が此あてがた祝御意と輕々數思ふたり疑ふたりするは佛祖へ對さ誠まに以て相濟ぬ事であるかち能く此邊を合点さて彌陀本願の名号と信行し往生極樂の大事を決定をるが何より勝てたる佛祖へは御恩報じれ爲、我身極樂往生の爲ま、唱ぬれば自から三心具足の名号故に唯南無阿彌陀佛〳〵」此一段大收結

時宗は部

阿彌陀經ニ曰舍利弗若有ニ善男子善女人一聞レ說ヲ阿彌陀佛執ニ持シ名號ヲ一若シ一日若シ二日若シ三日若シ四日若シ五日若シ六日若シ七日。一心不レ亂レ。其人臨ニ命終ル時一ニ阿彌陀佛與ニ諸聖衆一ト現ニ在其前一ニ。是人終時心不ニ顚倒セ一即チ得レ往ニ生スルヲ阿彌陀佛ノ極樂國土一ニ。舍利弗我見是利故說ニ此言ヲ一若有下衆生ノ聞ヲ是說ヲ者上。應ニ當發ニ願ス生ゼンコトヲ彼國土一ニ。

多勢賑々數、參詣せられしは、誠に奇特に存ま、古人の歌に「昨日見し人はと問へば草は葉ま露とこたへて秋風そふく」と又古人の詩ま「老来ると待て、方に念佛すること勿れ、古墳多くは是れ少年ぞ人」と斯る無常轉變は世は中に、何が一番安心ろと、いぬに、おれこ

評ニ曰ク才辯說教ノ上

評ニ曰ク四活自由ニ收束ス敬服々々

事、傳教大師は七難即滅の法も念佛を出したまへる凡う現世后世の祈り何事か念佛まさざんやとれたまへる嗟呼大なる哉念佛の功德當ゐ極樂往生は助業のみならず現世安穩は利益あらんとは誠に佛智不思議の靈妙といふべ如なり」此一段因緣

之を要するに、佛祖の御意は唯我々が惡い事とせぬ樣ま、少しづゝ善事と勤めて、佛祖を信ずる心を起ま、迷を除き悟を開く樣まなれかしと、思し召す御慈悲は外ま、さら〳〵なけれを我々が此あを

がた如御意と輕々數思ふたり疑ふたりするは佛祖へ對ま誠ま以を相濟ぬ事であるかち能く此邊を合点まて彌陀本願の名号と信行し往生極樂の大事を決定をるが何より勝をたる佛祖へは御恩報じは爲、我身極樂往生の爲ま、唱ぬれば自から三心具足の名号故に唯南無阿彌陀佛〳〵」此一段大收結

時宗は部

阿彌陀經ニ曰舍利弗若有リ善男子善女人一聞レ說ヲ阿彌陀佛執ニ持シ名號ヲ一。若シ一日若シ二日若シ三日若シ四日若シ五日若シ六日若シ七日。一心不レ亂レ。其人臨ミ命終ル時ニ阿彌陀佛與ニ諸聖衆一現ニ在其前ニ。是人終時心不ニ顚倒一即チ得レ往ニ生スルヲ阿彌陀佛ノ極樂國土ニ。舍利弗我見是利故說ニ此言ヲ一若有下衆生ノ聞ニ是說ヲ一者上應ニ當發ニ願ヲ生ニ彼國土ニ。

多勢賑々數、參詣せられしを、誠に奇特に存ま、古人の歌に「昨日見し人はと問へば草は葉ま露とこたへて秋風そふく」と又古人の詩ま「老来ると待て、方に念佛すること勿れ、古墳多くは是れ少年ぞ人」と斯る無常轉變は世は中に、何が一番安心ろと、いぬに、おれこ

り、安心ならんと頼むべきもれ、縋るべきもなとては、一もなき、唯此中に於て、吾人れ心身と支配して、最も力ある處れもれは、佛教で有る、而して佛教中、種々に、宗旨と別れ、各々宗門に依て、其修行の方法は異なるが、其中に就て、誰にても修行の出来やすく、又其修行とても、一心不亂に念佛申しさへ、すれは、往生極樂の大事、決定が出来るといふは、特に我宗門であるから、參詣乃各位其心して、彌陀れ本願と奉戴し、又我宗祖一遍上人が、多年此宗門建立れたえに、御苦勞被成下た、思き召しれ程とも、深く感銘きて、佛祖を信仰せねた、ならぬ筈にある」（此一段揖禮の言）

我か宗祖一遍上人智真圓照大師と申た生國伊豫國越智れ姓河野七郎通廣の次男幼と障子丸と申を十五才にきて出家となし初め聖達上人に仕にて隨緣と号し天台を學ふと數十年其后ち淨土に歸きて智真と名く建治二年三十七才の御年無比の誓願を發し一切衆生と教導きを決樂不退の淨土に往生せしめんと欲きて念佛勸進の行と企て聖道難行之家を出て淨土易行れ門に入り化他れ街におもむき初に宇佐宮に參籠き次に男山八幡宮に參籠き三七日間誓願れ旨と祈念し玉ふ已に神慮に協ひけん御聲を出きて宣旨れむねあり斯れ時他力本願れ深意を領解し歡喜身に餘り利他の行業決定せきめ其后ち熊野權現の寶前に於て一百ケ日懇念を凝き日夜止む時なし時既に至り熊野證誠大菩薩親く御正体と現き直に濟度衆生の方便を示し玉ふ曰汝の誓願不可思議なり一切衆生と哀愍するゝ故に融通念佛と勸是實に最上乃善根慈悲の至極なり善惡を謂はを信謗と亂さす唯南、、、、佛を勸めを（其れ算と賦るべき）（即ち名号の札なを）命終を期として更に怠るとなかれ尔れ吾は乃擁護して常恒

に道場と去らす汝必す吾を忘るゝとなかれ吾も亦永く汝と忘れす
と示ま玉ふて神殿に還入し玉ふ後ち三山れ諸神童子を現れ念佛勸
進れ筭と受玉ひて即ち他ま去り玉ふ其の勸化に隨て開宗已来今日
に至り代々れ上人(即ち遊行上人)諸國を勸進教化ま名号の札を授
與ま玉ふあり至る處樹頭の風に靡くか如し神德の厚さと他力本願
れ忝けなさと勝て之を一々述盡す事は出来ぬ程てある」此一段宗祖の緣起を演釋

偖前に舉示せま、贊題の意た、世尊善男子善女人、常に法の謂れを
聞き、阿彌陀佛の名號と執持ま、一心不亂にまて餘念なければ、其
人々は、臨終とて、此命と終る時、阿彌陀佛、諸〳〵れ、衆生と其前
に現出ま、ましまま て、極樂往生をなさしめ、くさるから、吾人た
また、常に其心して、法れ謂れと聞き、阿彌陀佛乃名號を執持ま、信

評ニ曰ク抑中ノ揚

仰し奉らねは、ならぬとれ御言葉と、考ひらる、元来吾人は天真爛
曼れ心性を具ま、何一つをして、知らぬたのなく、又何一つとまて、
分らぬものたなを、誠に利發なる佛性を具すに似す、父母に對し、妻
子に對ま、僕婢に對ま、朋友に對ま、其他世間れ交際に至るまて、み
な自心を欺た、他を欺たて、以て、私欲に耽り、我見を逞ふ〳〵、未来
永劫、浮む瀬もなき、罪業を造りて、之と愉快と思ひ、一時の逸樂に
溺きて、万劫の苦源となるを、知らさるとは、實に悲ま き事の限り
てをなきか、夫の春日百花乃開落するを見よ、露ほどた、偽りなた
ぞかし、又秋夜孤月の澄渡るを見よ、毛ゐとも、私ま なたろかし、然
るに吾人た實と嫌ひ偽りと言ふ、公けを忌み、私しを行ひ、夫乃花
の美なるか如く、月れ清らかなるか如く、なること が出来ぬとは、
さても〳〵哀れの境界なる者とふべきなり、前にも一言せま通

評ニ曰ク揚中ノ抑

り、此世ハ無常の世乃中なる、誰か百年の壽命を保ちなん、無常の世ころ悲しけき、うたのたの定えなき身ち、春ち夜ち、夢とやゐハん幻ちの別ちえ、更ゑ知れがさし、何をなきを、手に結ふ、水ゐ宿れる月影のあるかなきかなる世れ中に、穂れ上脱を、稲妻の、光り消なち、如何ぢん、實に電光石火夢幻泡影の謂れも道理なり、されち吾人ち今宵のうちゑも、如何なる事に逢て、息たへなんも、ちらる知れねハ、後生の大事を唯幾重にも取縋りて御頼み申すべ方は阿彌陀佛である阿彌陀佛は久遠實有妙覺果滿の佛でありて御智慧も御慈悲ち諸佛ゑ超越まちますから如何なる人ゑも唯一心不亂に名号を執持ち念佛申せち吾人として易々と往生極樂乃大事と遂け得さしめてくたさるゝゑ相違なゐから疑ひを起さす信心が肝要なる譬へば吾人が漁船に乗るゑち初めよるちて海上は危險と一概ゑ思

二百三十

評ニ曰ク巨河大川ノ渡ル々滔々一瀉千里ノ趣キアリ

ひ込みて乗組ざればドノ道彼の指して行く所れ神戸なり、大坂なりへ着することが出来ぬこれち信心の反對ち疑念がある故へなる、疑ち無れを信といふそれに引かへ、此船は堅牢なり海路何事かあらんと確く信じて乗込めば、無難彼岸へ着することが出来、これち初めゝら疑はぬ所乃信心の所る故なり、之と以て考へれを信心といふもちはいつまでち離されぬも乃なる、さて各位も別に無益の工夫ち入らぬ心丹一點ち疑ひさへなければ一足飛に、結構なる佛界に到れるなる、餘宗餘經の修行ち言ちゞ、五十三次、とぼ〳〵と、山と輸へ川と渉りて、驛路と、往来するか如くなれとも、我宗の法門は、文明の時節に逢ふて、運轉自在なる漁船ゐ乗り、天涯北辰の思ひとなちる、直ちゑ外國へ向ふが如く、易々と、往生極樂の素懐を遂ることか、出来るなり」此一段直喩法

二百三十一

左傳魯宣公十五年楚莊王宋と圍る時に宋文公よりて急と晉の景公に告しらせ、晉よりて解揚といふ者を使として宋に行ためし、楚に降ることなられ晉れ大軍れ頓て加勢として至るべしといはせけるに、鄭の國れ人は解揚を俘擒り楚人に送りたかれ、楚の莊王厚く解揚に贈物しに晉の兵到ることなしといはせけるに解揚は之を畏ゐりぬと承諾たて叔樓車に入に、宋の軍に向ひ有れまゝに申せたらは、莊王怒りて之を殺さんとなし給ふに、解揚は毫れ驚く色なく徐ろに言を發していひらく、君は能く命と制するを義となし、臣れ能く命を承るを信となを信は義と戴せて行ふと利せす、謀て利と失れすして社稷と成る風れ主なに、義を二信なく信に二命なし死して命を成すは臣の祿なり、寡君信臣あり下臣隨ふ事を得たり、死又何と求めんと莊王甚だ解揚の言に感たる宥してこれを歸したりといふ

評曰前段直喩トシテ應ル映セシムル因緣ニ來リテ提擧ニ話頭ニ作更ニ是ノ此隱ル

辨ス正サ者苦心處

評曰更ニ古哥ナ引テ此一段ニ結フ起シ又古歌ナ以テ辨ス舌老錄

嗚呼解揚れ自ら信する心の厚くして死尚ほ恐れさるの氣節れ何ろ其れ壯んなるやこれ蓋し解揚平素よく安心立命決定する所あるよりされば安んろ此の如き氣節堅固なるを得んや今夫れ吾人れ彌陀本願のあるかたき謂れを聞き往生極樂の大事と決定する者れ固より此身と阿彌陀如來に御任せ申し居るなり然らば即ち其自ら信する心の厚れこと解揚の如く死尚ほ恐れさるの決心もまた解揚れ如くならねばならぬ筈てある」此一段因緣又斡旋法

古哥に「阿彌陀とを迷ひ悟りを道さへてたゞ名にかよふいれ佛なり」とある凡ろ迷ひ悟りの道さへさとれ佛機互融し迷悟一躰にをりぬれば凡人とも佛身とも名付べのらを又名にかよふといひ掛さのは本願の名号を稱る念佛の息風い法身の氣命にをて阿彌陀佛無量壽の壽躰なるとれ意をありて吾人淺ましれ所の凡夫も一心不亂

こ念佛と申せば臨終れ時こは迷ひ悟りの道たへた悲智雙運れ阿彌陀佛ゑ國土なる極樂に必す往生か出来るに疑いない移れば換る世れ有様一年ましに重ねる齡ゆ「有明の月れ光をまつ程にわがよのいさく更ふけるのな」ゑれ歌ろ道理に氣が附さら信心供養や念佛淨行か專ら緊要て御坐る」此處結收（十念授與〜く降坐ゑ本尊三拜して自身れ席に入るべゑ）

○融通念佛宗れ部

日課の文に曰く十界一念。隔ニ通スレバ念佛億万返ヲ。即チ得ニ往生スヒヲ。

と偖參聽の人々い早々と能く入来せられまして、誠こ聞法結緣れため結構な事てある、凡そ吾人ゑ受がさ充人身を受け遇ひがたき佛法に遇ふて、此世に生活ゑて居るは誰れ庇蔭かといへは、みなこれ佛祖れ遺德餘貺てあるされば吾人は佛祖こ恩澤と報ゆるためにゑ設ひ此身と碎充此骨を粉こゑるこゑ其義務を盡さねばならぬてゑなゆか然るこ吾人は之を知りなからも別ふさゑたる難事を爲さは朝な夕なの動靜云爲悉皆な自由こして且安全ゑ得るゑ佛祖に對して其恩澤に報ゆることは爪の垢程も爲さゞるゑ寔に勿体なゑ充次第でゑないゝ而ゑて佛祖ゑ照鑒しを能く之を知らるゝゑ敢を之を罪し之と罰ゑたまゑぬは以て其大慈大悲なるを知るに足れり參聽れ人々よ說を聞く位れ事は格別難充事てはなゆか至りて易き事てある且說教は一宗乃極意と談して人々安心と定をるの基本なれゑ其心ゑて聽聞せらるべきなり」此一段揖禮の言辭

夫れ我宗融通念佛ゑ易行易修他力難思の妙行なり、祖宗聖應大師

評曰此一段全く演釋体

永久第五の夏五月十五日、中三昧定中に無量壽佛指陳ありて速疾往生は勝因融通念佛の要法と心傳直授したまふに權輿あり、鳥羽上皇御入會且つ鞍馬寺多門天皇諸天神祇と勸進〳〵たまひあふ盛んなり、抑〳〵本宗融通念佛といふは、一心三觀にもあらず、約心觀佛にもあらず、諦觀白毫等は念佛にもあらず、今日の凡夫現前一念即ち俄頃は忘心はうへお一聲稱名の顯はる、時自他は願行交〳〵融し多少の功德互ひに助け聲々無礙億百万遍の功德と成し須臾に曠劫の行と超過し刹那に上品上生に昇るは妙法なり故に佛勅には是名他力往生と告ぐ、祖釋には是名他力往生の行とのたまふ、知るべき本宗融通念佛他力難思は妙行は上智享棄し、下機領荷することを、謂ゆる夫婦の愚不肖なるも而も與かり能をるものにして、事々融通口稱は一法、巧みに諸根に與へ霄壤覆載は大造化育を、普門廣大擇ぶなく遺すなし、上々根の人終に能くうの闕を輸へす、下々根の人亦以てうの國に臻るべしと云へるう如きも名號不思議の所以なり況んや事々融通口稱をや凡下の一聲沙界に響は願々十方と貫ぬく實に佛智不思議の妙談仰いで信すべきのみ」此一段起伏法

こゝを以て彼の北天威靈なるすら尚ほ青衣の僧と化し來りて日課は稱名を大師に誓ふ、加之ならを三界所有は冥衆神祇を勸進は、念佛衆に列ね大師を幽贊はさまふ又、畏こくも後小松天皇の融通念佛御勸進御宸翰に云く但は一念も往生をと信して多念とはげむべしと云ふこと念佛行者の故實なり然るに多念は功德と得るおとは融通念佛にしくはなは、うの故は一切は天神地祇日本國の大小の諸神並びに上一人より、下萬民にいたるまて申をとおろの念佛、互ひに融通をる故に、自作は念佛は他の善となり、他作の稱名は自の

評ニ曰ク此一段全ク歸納体

善となりて、稱名の數無量なるが故に功德を得ること亦た無量なり、良忍上人の勸進尤とも、その所以あるえのなり（已上前後文略）と仰せられたり最もいみじき御勸進ならずや斯るめでたき易行易修他力難思の妙行といて何ら凡夫の望みをとどと云んや」此一段伏線法

今我融通念佛を他宗の念佛と比較すれば、他宗念佛の功德は夜燈の光りの如く、我融通念佛の功德は日月の光りの如し、何となれば我宗の念佛は一切法界に融通するが故に其の功德を須彌の高きが如く、大海の深きが如し、他宗念佛の功力は香山の小さきが如く、阿耨達池の細きが如き、何となれば我宗の融通念佛は今日の凡夫現前一念即ち俄頃の忘心の上に一聲稱名の顯るゝ時に自他の願行交〳〵馳し、多少の功德互ひに助け聲々無礙億百万遍の功德と成し、須臾に曠劫の行を超過し、刹那に上品上生に昇るの妙法なり各位の斯るありがたき宗門に緣を結び今日此場で融通念佛を謂れを聞き往生の大事を決定するを何と無上の幸福ではなきかを思へば各位の信心を疎ろにしてならぬ信心と大切に思ふべし就中親に孝行ねはならぬ親に孝行するは信心の助業にして信心の往生の大事を決定する助業である」此一段譬喩法回環法

評ニ曰ク此處結尾ト照應ス

昔し天竺の乾陀羅國といふ處に貧しき女ありて、常に袖乞して老母と養ひしが、其女に一人の男の子がありて、年の僅か十二歳美目形もうるわしく心素直に、世の中の道理を能く分り、心の内に思ふやう、母は毎日袖乞をして風に吹れ雨にうたれ、軒端の狗に吹られて、辻々に恥とさらし、家々に身を苦しめて、あられぬ難義をしたまひつゝ、祖母と我を養ふて下さるゝ、此御恩を知らぬといふわれ畜生にも劣りはてたことろと、深く歎き何ぞ袖乞を止めさせて、獨

りれ祖母様まも母様ふも、世と安樂に暮させたやと思ふ折から、母は袖乞に出たが留守ま、一人の旅人金五百圓持參して、身と賣る子供あらば買たきよし申し来まして、大ま喜こび忽ち其身を、五百圓れ金にかへて、其金を祖母様の前に置き、母様の袖乞となされつ、我等とお養ひ下さるゝことゝ、朝夕見るに忍びかたく、身と切り刻まるゝより悲しけれど、年端えゆかぬ此身なれは、何とせんをへもなき所へ、喜こばしくも唯今、人買ひが參りまして、私れ此體を賣渡しさる代金五百圓あなたと、母様とお二人まて、自今お心安くお命どれつなぎなさまを下さりませ。何時までえお膝のもとにて、孝行するが道なまど、うれは却て不孝行にある故、母様お歸てなされたら、能くお話し下さりませ、是か今生のお暇乞と、落る涙を押拭ふを、祖母は驚き袂を取て、是れ何事ぞかく淺間敷貧窮ふ生れついたも、前世の宿業、うなたか幼少まて父にたくれ、襁褓の中に母てし時から、母え毎日袖乞に出る、其留守まは此身の獨り取替もなき獨りの孫、そなたに別れて何とせう、此祖母まも母親まえ焦れ死まを泣死ねとれ事う、追付母か歸られたらえ、何と言譯するものぞと、倒れ伏て歎けとえ、振り切て商人につれらま、何處ともなく立出さ、程なく母親歸り来て、様子を聞て氣えを狂亂、落穗と拾ひ菜を採り、菜と摘み水を汲むうちにえさそ我子か待焦れん、いうにせしそと其れはかり、樂をみにして暮せしを、案に相違な彼れ子れ心底、あとひ打れ敵かれてえ、我子を一所まをらすころ、親の樂みなるえのを、備々つれなき不孝者、此の五百圓金、うれしふないと涙に咽びて歎けども、行衛をれねえ爲ん術なく、唯悲みに日を送てをか、

此頃乾陀羅國の西北の方角に、大蛇れ住める池ありて、春夏秋冬れ

初め方に、十歳あまりれ子供一人つゝ、其大蛇の飼食にうなへて祭りをする慣習なりしか、此ふ曇摩訶といふ長者あるて、獨りれ娘と其祭るに出さねばならぬ番に當りたかた、此子と五百圓に買来りて其身代りに立ることゆへ、直に彼地る連れ行て、池れ傍に棚と作り、其上る縛りつけて、大蛇の食物に供へ置さ、皆々我家へ立歸る、然る所る不便や、其子は斯の期の至り誰を恨みん様もなく、濤られなから涙と流し、故郷れ事と思ひ出しゝ、母様戀たと泣つゝも、南無阿彌陀佛〳〵と稱ふるうち、池の水は二つに破れ、大蛇た頭を振上けて、割と開ける眼より不思議なるかた、血れ涙をはら〳〵と流し、人間の物いふ如く聲あけて、我大蛇となりて此池に住こと久しき間毎日三熱の苦しみと受るる依ゝ、人間の生血と吸て、其苦みと暫しか程れ忘れさるる、今日は無量億劫るも聞き難れ名號と稱ふる聲、唯今うなたゝ聞せてくれた其功德るゝ早や三熱れ苦みを遁れしうや、此後こゝる人身御供とそなふるに及はぬと、云て忽ち底に沈みされれ、其後此子た危う命を稱名の德るて助りたゝ、上る曇摩訶の娘と夫婦るなり、遂に一國國主となるて、十分に孝行盡す身となるしよた、姿く某書に記しゝある何と各位此話をどう聞る、年なら僅に十二歳身た大蛇れ飼食ふなつてた親と安樂る暮させるいと思ふ一念諸天善神も御見捨なされす一生袖乞をへさ身か一國の主と仰のれさも全ゝ孝心乃一念力たとひ是ほどの孝行た盡せすやをんせめてた親の仰せる背かす分際相應の孝行はいたさて叶たぬ筈なるる冤角ふ親れ心にも叶たぬ事のゝをる者が世の中には有りかちな親れ心ふさへ叶たぬ者か何ほど神佛ふ祈りしとて感應あるへき筈がない偖又人を取て喰ふ大蛇てさへも南無阿彌陀佛れ

評曰ク此處前段ト照應ス

聲を聞き涙を流して喜こんだといふ其の名號は謂れを聞ながら何程邪見な人々でも大蛇よりも性質勝れた所があれば之を聞きて往生は妙果と得られぬ筈はないから往生安樂は欲せば何でも念佛の度と積て傍ら善業と修める事が肝要て御座る」此處收繳(此に於て回向を壇と降て佛前三拜して自身の席に入るべき)

真宗の部

以上は皆な著者は手稿せしものに係る而して真宗の說教に至りては特に菅原智洞和上及椿原真福寺上人は口述せられさる高說を擧く是れ大に著者は思慮する所あるに由れて其理由は茲に縷陳せすと雖も看客諸賢慮せらるゝ所あらば亦以て著者か微意ある所は諒知せらるゝに敢て難からさらんとみ

(前略)縱ひ行住坐臥に稱名をとも彌陀如來は御恩を報ぜ申す念佛なりと思ふべきなりこれを真實信心の得たる決定往生の行者とは申すなり

是れは御文の中の、御言葉ふて、他力信心の得さる姿と、佛恩報謝の稱名といふ、故に御文にも、我命あらん限りは、報謝れためと思ひて念佛申をべきなり、之と當流は安心決定したる、信心は行者と申すなりと、仰せられ、其外往々に佛恩報謝は念佛申すう則ち信心得たる姿しやと、仰せ御意い、擧て數へられぬ程ある ことなり、これ何故なれは自力策勵の機ぶてまだ他力は信心を得ぬ人は、臨終は夕へまて、往生決定の思ひに住せを、參詣も、供養も、稱

名ゑ、禮拜も、さ、淨土參ゑか、したさゆゑに、此方より眞實のつを
を佛へ掛けて助らんとす乱風情なれいなか〳〵御禮報謝どころ
へい行屆かぬ、そこと祖師聖人も助正並へて修するをば則ち雜修
と名づけたり、一心と得さる人なれば佛恩報謝するこゝろなしと
御意なされた、又た他力信心れ行者ゑ最初の一念皈命の時、願力の
不思議より、佛の方にて性生治定、我等は知らず覺彩ども、此世か
ら、はや光明の中に住む身と了解申したれば、やれ嬉しや、有難や
ゼ御恩よろこふより外に何が、あるものそ、爾れば報謝れ稱名と云
ゑ他力信心れ姿なゑ、總じて物には姿と云ふことがあれて、節たる
は彼れ南山れ貌た、穆々たるゑ文王の貌さ、殊勝なるい出家の貌
た、勇々ゑさい武士れ貌た、窈窕たるゑ女の貌さ、或ゑ詩の貌、歌の
貌、かれ春風着ゝ物華木蘂發ゑ、自然ゑ富貴なる氣象あるゑ、詩れ姿

評曰 物説自ヲ手初一意得タ
ニノシ説飾何段學段ヲルヲ多
姿來ノ等ヲノニ注所カ
クリヲ姿ノ説人深ガモ
萬汎テ勢ト妙敎此ハク亦ン

あり、さて又歌の姿て云ふならい、其心余りて言ゑ足らず、嘉める
花の色なくて、香殘るか如くなるゑ、在原業平か歌の姿、又た言は
巧みにて、うのさま身におゑず、云はゞ商人のよさ衣着たらんが、
如くなるは、文屋康秀か歌の姿、さては言ば幽かゝして、始終り幽
のならず、云はゞ秋ゆ月と見るに曉の雲ふ、逢へるが如ゑとい、喜
撰法師の歌の姿、或ゑ衰れなる容にて強からず、云ゑゞ美女の惱め
る所ゆるに似たり、強からぬい女ゆ歌おまば、なるべゑゼゑ、小野
小町か、歌ゆ姿と云ふ如く、蓮如上人の御言ばにも、思ひ内ゑあれ
ば、色外に現るとうや、左のみ形に繕はねども、信心ある人は自ら
その姿ゑ見ゆるゑゆなりと、仰せられて、寒ければ、寒し、暑ければ、
暑ゑと口にも姿ふも天然と見ゆるか如く、一念往生治定と覺悟幽
かに、相濟んだる身の上は、天然自然に、伺ら嬉ゑや、南无阿彌陀佛

評ニ曰ク波瀾萬丈

忝なや南无あみだ佛と、口よも浮び姿にも現えまして、恭敬參詣乃足手をも、運はひでは叶はぬ筈じや、爾れば報謝と云ふが取も直さず信心の姿なり、信火内に在まば、行煙外に顯えるゝとゆふ如く、内より火と焚けば必す外へ煙が見ゆる、胸の内に信心ゆ火があれば必ずロへ南无阿彌陀佛ゆ煙が顯はれひで叶はぬ筈じや、爾れば信心と報謝とは、えと離れ物ではなゆ、全波全水と云ふ如く、水全く波、波全く水、水を離れた波でもなき、波を離れた水でえない、波は水の動く姿、煙え火の燃る姿じやとつと、靜まつてある處と、水とえ云ひ、風より誘はれ動ひて出る處と波とゆふ、一念往生治定と胸より落着てあるを、信心の水と云ふ、うれが見佛聞法ゆ風より誘はれて、あら嬉しや、有難やと、口業へ動き出る處と、御報謝乃波と云ふ、爾れば信の上の稱名は、大命百年晝夜不斷に、相續をるとも、念々聲々ゆ南無あみだ佛が、皆悉く他力回向ゆ大行ゆまて、たゞゆ一聲ても、佛智ゆ大信を具せさる、念佛は、ねのらなゆ、去より依て、昔蓮如上人の御在世にえ、或人問て曰、信と報謝とは二つなりや、一つなりや、上人答てゆ玉はく、たゞ一つなりと、爾るを、や、えすれば、同行の中より、信と報謝とを、別物の容より相心得て、さては一念御助け候へと、頼み奉つたれば、其時往生治定にて、光明に攝取て再ひ捨まひとあるからえこゆ上は、御禮報謝の念佛、すてに御禮とあるからは能く申ゑた程乃こゆはあるまいけれど申されすは其通りよ、醫者より藥禮するさへも多てえ、少ふても、おゝろかる醫者は、なんとも云はぬもの、まして彼方を佛でないか、御禮の念佛か、多いか、少ないか、大事かすでに、御文章よも、誓願を信ゑて、一念の疑心なゆ時は、いかに地獄へ墮んと思ひても、彌陀如來の光明より攝取られ參ら

評ニ曰ク語勢一轍電光陰雲ノ中ヨリ發スルガ如シ

せたらん身は、我計ひよてい地獄へも、おちずして極樂に參るべき身なるか故なりと、仰せられたではないの」此一段収關法、主客法、波瀾法あり皆是れ次段と起すの手段

すれは、一念たゝんだ、上からは、いゝよ、地獄へ落たひと、思ても落られぬとあるえのを、懶惰なら、懈怠なら、大事か大様、無沙汰くるしゝらすと、たゝ放逸よのみ、惡業と作り、佛恩とえ、報謝とも、思ひ付けす、兎角誓願の不思議と信して疑ひさへ、せねば よいと、世間の理屈で、安心を埒明けて居る族らがあるものじやが、甚だ歎ゝしい事ぞ、それえ他力の信者でも何でもない、根ゝら、佛法の道理と知らぬ理屈えのと云ふえの、理屈といふえ、道理よ背ひた事式、理の詰る容に云ひ募るが、理屈しや、總ちて、世間の上でえ、勳もすれば其理屈者が多ひえれで、喩へば一さび親となり、子となつて、生れて來さゝらえ、子と衰むが親の習ひでえないか、爾れば不孝よあたと云ゆて、我子を惡む親はない筈しを、勿論なれえ不孝よえせぬ年老て病み煩ふて、何の役ゐも立ぬ親なれと、口に食せずよも置ぬ養ふてやる、それよ榮耀な口がわるい、看食たい醫者よんでくれ、藥れみさいと、云はれる、醫者を藥を、療る病ならとうをもせうが、八十九十よ成をの中風、醫者をも藥てえ行くものては御座らぬ、それに物と入れるのえ淵へ填草、盗人よれいじや 又た錢があれば看も買て進上けれと、今日え一文え御座らぬ、おんしや、勘當ちや、はや死掛つて、居を、一人の息子を勘當ちて、をうせをを思はれる、勘當をいふものが、滅多ゐなるえのて、御座らぬと、年老て行歩も叶はす、病煩ふて居る親を、まねて會釋ふ容にちを、朝夕親に血れ涙と、流させながら、自身不孝者ぞと、云ふ事と知らぬ戚氣

評ニ曰ク雷公中天ニ鳴リ響キ渡ルガ如シ

ようを、仕容摸容もないものしや、彌陀を親なり、我等は子なり、一たび御助すけ候へと頼んだ者を再さひ捨てましとあれたとヨ、ろこれ理屈と慕れる計りて放逸懈怠ヲ我儘乃ゑを、云ひ散らあて、朝夕佛に血の涙たを流が参せまするた有らふことてたない、いかよ親ら勘當せぬ捨てはせぬとて、それに驕つて不孝となさば人間とた云たれぬ牛馬よりは劣つさものじや、いかに如来が捨てはなされぬ画像木像、えの、れつしやれぬとて、御恩報謝の志なを、臨て會釋容な、仕形は、有ふことてはない、ろれと何とて信心の人と云はふろ、いろよ最初の一念て、往生治定をあきば迚、其上れ稱名は無益のえの、容よ思をゞ、ろれ最初に決定しさと思ふ一念も、則ちこれ邪信の一念なるゆゑに、報土往生は叶はぬ、親となり、子となつては、生れされどえ、一日の孝行する間もなくて、ざはと、命終るた是非よも反たねどえ、存へて生長し乍ら、孝行の志しなきは子と云ふものではない、一念佛助け玉への端的に、其儘命終されば是非も、なけれど、其後れ命存へあり乍ら御報謝の志しなきを信者とた、どうもゆたれぬ、爾きた、ろの壽命の長短に隨て乃至十念なをとも、百念なりとえ、相續して捨ざるこ参、本願れ乃至十念の御約束に叶ふて、往生の正業を、成就する人と云ふものじや、ろこを善導大師た念々不捨者是名正定の業と釋し玉ひさ」此一段婉曲の辨説光餘萬丈

爾れば、一念往生治定の覺悟にさへ、なり得たらば、なんてあらふと、稱名念佛は捨やらぬがよい、爾しながら、斯くいへばとて、數珠と操り、數を定めて、稱名の遍數を積ねば、正定業にならぬ容よ、思たゞ、ろきた謬りしや、最初乃一念が即ち正定業なるゆゑに、念々の稱名が皆正定業となる、喩へば佛舎利れ分身するが如を、始めは

評ニ曰ク舌頭琵琶湖ヲ傾ケ雄辨富士嶽ヲ拔クノ趣キアリ

評ニ曰ク此處揚中ノ抑

たゞ、一粒の佛舍利なれとも、年月を經るに隨て、二粒となり、三粒となる、二粒三粒に分したれとて、最初は一粒に底もつかず、減り目も見へず、最初も佛舍利、後のも佛舍利、さらに別はない、最初の皈命の一念が、他力の佛舍利にさへ、違ひなければ年月存へるに隨つて、段々一念の信心も分〳〵に出るのが、御報謝の稱名しや、去に依て、最初の一念も、正定業後の多念も正定業、に去て、更に別れなに、に若去最初の一念か 正定業とならぬ一念なれば、其後の念々も、又ゐ正定業とれならぬ故に、法然上人も、一念と不定に思へば、念々皆な不信の念佛なりと仰せられさう、うの事しや、すれば報謝の稱名と云ふか、取も直みす、他力信心は色〳〵や、まづ他力信心と云ふを本願は三信〳〵や、三信とは、一に は至心、これは行者の淨土に往生せんと、思ひて、如來とたのむこゝろに偽りなきと云ふ、

評ニ曰ク此處抑中ノ揚

二、には信樂これは行者ら如來と頼み奉れは、必ず御助に預ると深く信ぜて疑なきと云ふ、三ふは欲生我國こゝはその淨土へ生れんと欲ふ心の發るを云、すれば三信ゆは云へとも、三つの品のあるてれなに、只一念南无あみだ佛と、よびたてゝ、頼み奉る時、御助け一定と、領解をる心ぞや、故に善導大師は第十八願を釋ぜ玉ふとき、三信の詞をを替へて、稱我名號と御示〳〵なされた、それを法然上人は衆生稱念すれは必ず佛の御助けに預るそと合点ぜされは、うれ當体に於て自然に三と具信足する故に、此理りと顯をさん爲に、三信れ文と略〳〵て稱我名號となされたもれしやを、斯御釋となされた然れは信心の體は一箇の南無あみだ佛て、これを信をれは信となてこれと行すれは行となる、その故は一念皈命れ心起ると云は、即ち南無の義なり、我の南無の心の起ると云ゆは、即ち阿陀彌佛の

許ニ曰ク此喩以テ此説教全編ヲ振激ス

御心より起さゝめ玉ぬ、故ゝ一念開發の處に、即ち南無阿彌陀佛れ大行と成就するなれい、設ひ心ゝ助け玉へと信ゝたたゝて、一聲の南無あみだ佛とゝ稱る違まなく命終るとも、願行信行具足ゝて、一聲淨土れ往生と遂け奉るとしや、ろこを法然上人れ御言には口にて稱ふるも名号心ゝて、念するも名号なれゝ何れゝ、往生の業となるへゝと(和語四二十四丁)仰ぎられぬ、爾れは信する力らて往生の業となるでゝなゝ、唱る手柄て往生れ業となるてもないもとより六字れ名号に、往生れ願行と成就してあるゆゝに、信ゝても唱へても、往生の業となる事は同し事しや」此一段抑揚法次段引喩法

喩へゝのれ本草綱目の五十一に、虎骨救ニ犬咬毒一と書さは犬に咬まゝて痛むには、虎の骨と灸りて、それ疵口を慰せゝ、忽ちに愈るとあるか、若ゝ虎れ骨のない時は掌を頼げゝ、疵を摩り口の中にて虎来(コライ)〳〵と云へは、其儘愈るとある、又た醫書ては、こぶらかへてれ事を轉筋と云ふゝ、それ轉筋にゝ木瓜(モッカ)か藥しや、木瓜はぼけの事しや、ろこて足のこぶらかへりれ、ゝた折にゝ、木瓜を煎ゝて服してゝよし、早速木瓜の枝と灸て、慰るゝよし、急ゝ水瓜のない時ゝ手を灸て撫て、、た、木瓜〳〵と云ても、愈る、此ことも本草綱目十巻に見へてある、これ服してゝ、撫ても、愈ると云ふは、もと水瓜の方ゝ、轉筋と治する徳か、具ははてあるでしや」此一段引喩にして又關鎖法とも將ひたゝ

今もその如く、此の南無阿彌陀佛れ中にゝ、元より衆生煩惱の病と治する願行の徳か、備つて何るに依て、信しても行しゝも埒か明く、依て善導大師ゝ今此の觀經ゝ十聲稱佛にゝ有ニ十願十行一具足すと仰せられたこれ有て具足すと仰る有の一字か、他力れ眼ゝ元来名号の法体に、願行か成就しゝある故に、稱る當体に、ろのま

評ニ曰ク上ノ下ノ起ノ承ケ起ス説ナ説モ来リ而ル去リ談ル毫ル餘ル蘊ル盡ル結ル束ル收ル説ル敎ル是ル最ル者

上品ナルノ者

、具足して、浄土へ參ると仰る、爾れと、一念他力に乘ぜされば、信する處に、稱る道理を具ぜ、稱る處に信する、道理と具して、信行願行且らくも、相離れぬ、是則ち阿彌陀如来の御誓ひに成就して、あるゆへしや、うこと、祖師の御言ゴ信の一行の、一念と離れたる、信の一念ゑなき、その故は行と申すと、本願の名号と、一聲唱ゑて、往生すと、申すことと聞て、一聲をゑ唱へ、若ゑ十念をも、せんと行也 此御誓ひと聞て、疑ふ心れ少もなきと、信の一念と申すなり、乃至これ皆、彌陀れ御誓ひと申すことと心得へき、行ゑ信とは御誓ひを申すなゑ(文來灯鈔)爾れは信ゑ行も一事とぜて、彌陀乃誓願力より顯はれざるものゑなきなり」以上收結

○真宗の二

評ニ曰ク起首疑感ノ二ノ字後段ノ開化ノ二字ニ照應ス

不了佛智れしるじにえ如来れ諸智を疑惑して罪福信し善本をたのめは邊地ゴどまるなり

斯の和讃ゑ、高祖大經れ胎化段ゴ由ゴて、二十三首れ和讃を製作ぜ玉ふ、初めれ一首なり、不了佛智とえ、佛れ御心が、明に知られ給ふら如来れ御助を疑惑する他力佛智と疑ふ心より、己れが罪福を信する淺間しき、心が起れは、往生も、いふゝと祭事、喜ぶ心が起れえ往生ゑ亦成るへ如様に思ひ、機の善惡に依て、若存若亡するれか罪福を信する相、此れ心れ起るの佛智を知らぬのらの事なゴ、明に佛智に夜の明けれは、己を忘れて、他力ゴ安心するより外はない」此一段起

首次段轉換法

都て物事を法れ謂に暗くゴは、安心のおらぬ者ゴてある、此頃ゑ文明開化乃御時節と、いのなる人も云ふ事なるの、此世の事に文明開

評ニ曰ク開化字義ヲ解釋ス

化ちてみれた立派な皇國の良民とおる、彌陀れ佛智ヨ文明開化ちてみれは、美〜ち他力信心れ同行と云はる、釋迦如來か大經と御說なさる、にも開化一切とあれば吾々と開化させて、報土往生安心させ度より外はない、文明開化と云ゐ文は文章、明は明了、都て物事に明らかになりた事、開化とち開悟とち開解とち云て閉塞ヨ對する事、開と塞とゐ、丁度目と塞で見れは、何事ち分らず、其目と開て見れは、是れは山、是れは海と分る、化れ字は變化と言て、物事の疑じヲ、昔れ小人ゥ、今ハ君子と變り、昔笑れた人か、今譽らる、變て來た、天地れ万事に目と塞ひた如く、物れ道理の分らかんだうと〳〵數、世渡ヲをした者か、物れ條理ヨ目か開て見ると、昔に替つた人となヲ、去れゐ文明ゥ即ち開化ちたと云ふ者也」此處先つ曰と擧け綱と張る此開化と總して云へち一、ち物れ開化二ヨは心の開化物れ開化と

評ニ曰ク開化種類及狀況ヲ精覈シ來リテ後段ヲ提起スルト爲スル伏線ヲ何等ノ老手段ヲ

は智識を開き天地万物れ理ヨ達し百工を盡し百用と足らちを外万國まで譽ヲを取るの物ヨ開化ちたれなヲ又心乃開化とち私慾れ人情を去りて忠良誠實ヨ心と持つゥ心れ開化と云ふ者人と云ふ者は天地間に撫育せらるゝちのなれは天地の理ヨ背きてゐ身を全ふする譯ちなゐ善と作せは福ち惡を作せち災するは勿論自然乃道ヨてある古人の語ヨちゑ人れ善あると人ち欺むく可けれとも天欺むかずとも又天聞けども靜にちて音なちとち云てあり頓と隱しも包もならぬ者也其乃道理ゥ見へぬから私欲我欲の不實が出來る之れか盲目と云者能く其の道理ヨ目が開て見ると忠良誠實に暮すのち約る所は吾身れ爲めと思ひ正直ヨ暮す身となつたか之か心れ開化と云も れ朝廷よりは人間の道を万民に諭せよと仰せらる、真の良民とし たいと思召す去り乍ら此目か明くやうヲ明かぬ者にて免角人情ゐ

評ニ曰ク此一段百尺竿頭一歩ヲ進メテ横説竪説ノ處

覆れて人と欺き眼前の利に目か付て實れ天福を待身丹なる無る者にて何る是れか朝廷の御胸の痛たむ所也之ゝ爲め文部省と置かせられたる事なれは機無して禍と招くより機樂ゝ天福と受るゝよゝ

釋迦牟尼如来も浄土の衆生は、開化ゑ易しと御説充なされて、此土の教は惡俗になれしえて、開化ゑ難ゑと、御歎さなされ、佛法の上てえ開化せすして、閉塞とて、とちふさひてあるを疑と云、疑と疑

光明とも、疑闇とえ云て、都て法れ道理の分らぬゝ、疑ひと云者ゝて何る、此れ疑ひゝ二あゝて一ゝは見疑二には疑蓋此の見疑と云ゝ死ぬる機をえら作ち、機ゝ掛らす、落る地獄ゝあるゝゝ、何とも思えすゝ居る人の事也、今落る身と持ち作ら、何んとえなしゑ居るのは、知らぬからの事也、往来に陥阱ゝありゝも盲目ゝ恐氣なゑふ向へ行く落るまて何んゑえ無ひか、實ゝ見へぬからの事也、其れ代ゝ、はまつた時ゝ、一時に後悔をる、是を大經ゝは、心中閉塞意不開化大命將終悔懼交至と御説なされてある、然るゝ此坐の同行えも落ちぬ先から、落る事に機の掛ゝ、死なぬ前から、死ぬる事の案事られ、どうどう此坐へ出て来たは、一分開化したのしゃぞよ、見へゝ来たれゑやぞよ、落るまで知らずゝ居ゝ者の、今から心ゝ掛り出ゑたは、調熟光の月の光りかあきえころ、大病人か大病と知らぬ程れ大病では、醫者が戀ゑうもゑは 古人れ語にえ大病と知らぬ程れ大病では、醫者が戀ゑうもなかつたか、大病人ゑ知られて、見れは、醫者か手寄となる落ると、落るを知らなんだ間え御助えゝ戀しうなかつさの、落る身ゑゃと、明ゝ知られて見れば、彌陀れ喚聲が戀ゑうかる、偖て二ゝ疑蓋と云ゑ此の御助けと聞ゝ上て疑ひあると疑蓋と云ぬ是れは機が淺間敷う

評ニ曰ク辨説婉曲コシテ妙イフ可ラサル者アリ敬服々々

なきは、往生し如何と思ひ、少し喜ひうあれば往生し、なほふと思ふ機の善惡に拘り、已か罪福に目の付く人である」此一段波瀾警策法共に備はれり

夫を今吾高祖は、不了佛智のしるまぢやと仰せらるゝ、佛は心う見へぬうら吾機の善惡に目か付くれしや、善知識の教によりて彌陀永劫は不思議力と以て助を在す、御謂は、即ち今の南無阿彌陀佛也を、能く〳〵、六字は御手柄う、聞開かれて、見れば、最案事樣、道理は無ひ、往生は一定を、夜の明たう、御慈悲の疑ひは目は明たはし や、昔の案事か今は安心と、變り、御恩喜ふ身と、なりたか、明信佛智は同行也、王政維新の良政に逢ひ、文明開化まて見れば、美くしき、皇國は民とおり、外國までも譽まれと舉げ、善知識の御化導に逢ひ、明信佛智と開化すれば、其場を去らず、正定聚、三世諸佛に譽れを舉ける、身となる故、釋迦如來は、之を廣大勝解の人と、御譽め被下る事ふてある

此處収結言尚は尽さぎして止むるの狀あるい却て妙味あるを覺ゆ

第六章　法話門

火車は說

評ニ曰ク大聲山鳴リ谷應ズ

淨土は法、門内にて常に說く所は迷悟染淨は中間を弘誓の船と談し、又火車罪人を載せ地獄に引致をと云ふ者を或は之を畫さて鐵車罪人を載せ牛鬼之を挽くの圖を作る、此圖や此說や未た佛理に指を染めざるは無宗教者の眼孔より見、耳根より聽くときは之を貶ふて癡騃は翁媼と嚇嚇をるは具せし、啻に意ととめざるのみならす、遂に吾佛理を併せて棄つるに至る者なきと保せざるへからす、豈肯を辯を好むにあらざるも余か此說をうるへからざる所以なり」此一段起首

評ニ曰ク此處車字火字ノ曲聚故ヲ精ス

元來車とは往昔黃帝始て車と造る故に名けて軒轅氏と號すと、大平御覽第七百七十二卷にあるを淮南子に蓬の葉の風に飄されて空に轉をるを見て

車と發明すと云ひ、御覽の釋名に車は舍なり行く者の處をる所まして舍に居る若きなりと云へり、是に於て乎知る車は此よりを彼に至るに暫らく行旅れ舍とするの物れ名なり即ち物と載運する器械の名稱のみ、又火車乃言、北史は高岳攻二潁川一飛梯火車盡二攻擊之法一又新唐書第一百五十五卷列傳第八十馬燧傳は燧乃推二火車一焚二朝光柵一と見ゆれと今は此火車乃謂はあらす（此處目を舉て綱と張る）

火とは佛者煩惱を喻曉をるの套語ゐて、心苦を惱といひ、身苦と煩といふ、常には談稱して身心の苦と俱に煩惱と稱呼を、乃ち諸佛集要經第三ゐを貪火極洞然何不レ生二驚怖一。尼乾子經第六は貪心如二野火一熾然不レ知レ足。正法念處經第五は欲心猶如二火焰一。長阿含第一大本緣經れ一は不下爲二婬火一之所中燒然又不下爲二欲火一然上。法苑珠林第九十に大莊嚴論を引て身如二乾薪一瞋恚如レ火未レ能レ燒レ他先自レ焦身と述へ、終南大師を毒害火を禮讃に示し瞋嫌の心能く功德の法材を焚くと教ゆ煩惱を火に譬況することは經に論は枚舉に遑ならず涅槃は聖行品七之三は是諸外道無明所レ覆遠二離善友一樂在二三界無常熾然大火之中一而不レ能レ出と直は無常を火ゐ喻ふ又地獄道のことは恒に火途を說く之れ三途れ隨一は て謂ゆる三途は火途（瞋恚）刀途（貪欲）血途（愚癡）の三惡道なり村翁野蓋れ亦雅に言ふ死出れ山三途の川とは是なり、これ山とれ川れ源を指を者は て即色身と山とず依因なり川とれ心法にて因なり死出の山に四大れ山の訛りは て此肉身乃ち地水火風れ四大の和合聚れ山なり此生有現界の四大れ山と脫離して心識始て中有れ幽界は赴んとする相と四大の山を越ると云ふ三途の大河三途の黑闇、此四大に胚胎す窃りに觀察すれは現前生有の四大焰々たる火途なり火車なり死して始て談すべき者にあらす 觀無量壽經れ說相說て看るべし地獄れ猛火面前眉を燃くれれあらん」第六段に照應す

評ニ曰ク宛然穢土ノ好畫幅

評ニ曰ク此處火字車字眉々連下シテ先ツ姿ヲ取ル

觀經下品生中說猛火變爲清涼風等其證也とを嗟呼地獄は猛火と目前
に證なりと斷言する何の疑ふところゝ之れあらん、看よ諸彦こゝに目前に
て忽然一たび現ゝ貪瞋互ひに競ふことあると、佛世尊の慈眼よ利此れ是と
照覽せば焰々然さる地獄の猛火にあらずして何ぞや、宜なる哉煩惱の煩
は字面に火と潮するゝ象ち火に双ひ負ふ音也、おれ余が火車の火といふ
これ是れなり」此處幹旋法

車とは輪回は義にて十二因緣を基とをて六道は生死と循環するを謂ふ
心地觀經第三七ゐに有情輪回生六道猶如車輪無始終南本涅槃會疏
二本(四十)に付往來流轉猶如車輪と云ひ摩耶經上(三)衆生輪轉五道疾
於猛風と云ふも車は謂也昨日(過去)今日(現在)明日(未來)と移り往き盛
者必衰生者必滅、花飛ひ葉落ち鳥啼き水流れて、時須臾も止らず無常有爲
のとゐるや世親尊者は俱舍論に生住異滅の本相の上に一相宛ゐ亦生住異

評ニ曰ク、此處以下火車無常大鬼ノ六字照應シヒビヲ雲ヲ呼ヒ雨ヲ呼フ之妙アリ

滅は隨相と示玉ひ之を近く喻況すれば燭火は焰と異ならず炷の本ゝらよ
り生々熄を炎の尖末亦死々をて休まず其際の一穗の光焰も猶沈思諦觀す
れは分々抄々生住異滅ならざるもなを此刹那々々は生滅の相續して息ざ
ると凡夫認て常住は看と做す衰なる哉や凡夫の看を常住となを物是れ
無常虛假の旋火輪にして夢幻泡影も啻ならず此本涅槃の高貴德王菩薩品
に人命不ゝ停過ニ於山水一と說き空海の秘藏寶鑰に生は生れ生れ生れて生
れの始に暗し死に死に死ゐ死て死の終りに冥をと云ふて三界五道何處か
生滅輪轉地ならざるを此の有爲無常を稱をて大鬼とす一切有部毘奈耶は
三十四に無常の大鬼髮張ゝ口長舒ニ兩臂一抱ニ生死輪一とあをて無常と大
鬼とす」此處關鎖法

鬼とは近々いへは佛は反對なり佛を涅槃に法性といひ常住といひ寂滅と
いひ无爲といひ淨樂といふ乃ち無衰無變不生不滅は覺位なり之に反する

評ニ曰ク紆餘曲折

れ大鬼なれと無常なと苦也有爲也乃ち肇論に夜半に力ある者あり乾坤と負て走り日月と挾て飛ふ是れ何物ぞ強て名て無常といぬえの是也淺近に談れは慈悲えなく情けえなく貴賤依正の論なく只管に滅壞を促すと職とする

評ニ曰ク此漢と無常れ怨敵ともいふなりかれ不死の藥ともとめ玄泰皇漢武もむなき處伏線

くさとぬた、悲風の驪山 杜陵のぬもとまむせぶあと武勇のむろりこと長せ玄樊噲張良も名をのみのこせりいまだ遷變有爲れあだをふせぐ弓箭あることとさうす綺羅三千もそらまれひたり漢李 唐楊のたほやかなりを玄すがたえ一聚れちりとなりぬ付法藏の賢聖も悉くうくれぬ有智高行れ聖人もうくさらぬは無常の殺鬼かと云へり」第三段に照應す

嗟呼終身の營々屠所れ羊の歩々に命數の縮まる者と毫も異ならす吾人名と利と東奔玄西走玄將來餘慶の因種を拋棄し自ら害し甚玄きは又他とえ害する乃徒なきにあらを人生百年た生涯れ道中なり故と俱舍に世路と說く已行と(過去)正行と(現在)當行と(未來)れ性なるが故ふ或ひた爲ニ無常一所ニ呑食一と云へり舊俱舍にも無常所食と說て既に火車と誨へ恒に鬼乃餌を示す所の張本なと參聽の人々幸ひに自から已れう能と思量せよ日々れ云爲六根れ動作總て貪嗔痴と基ひせざるえなき佛眼よと哀愍若傷の觀察と下さば何ぞ火車上具縛れ人と云えざるを欲せざるも得べからさるなと逝く者を夫れ斯れ如き乎百年れ日子えと分拆思考すれは出息入息去て又返らす孰か無常殺鬼れ運載を免んや鳥部山のけふとみねにもれほりふえとにもたつわれもいつかそれかすにいらんあだし野れ露あしたにも死に夕ともおつ誰れとても他所にやはれえふべき現前の市街村落ふつれの時う火車ならざる何れ處ぞの火途ならざる企望する所え參聽の人々俱と三毒を遠離し道德と修められんことを常住涅槃れ妙域を志求せすんば同く是き火車上れ旅人ならんのみ迷を迷を知らぬ大覺の後始て迷と知る

評ニ曰ク悽婉沈痛

評ニ曰ク此處波瀾

評ニ曰ク叙論ヲ去來シテ追ヒ一ツニ絲紊レテ

車上翻つて車上と認得せざるは車は舍也とて行く者の處んする所なれば也百年の世路も盡るの日なかるべけんや火車の當頭此と去て地獄豈疑あらんや暗く火車の喩体と指陳し佛理の萬一と髣髴して余が自ら警覺するところを敷演ふて聊か以て參聽の人々に告く」收結の處

○輪廻流轉の法話

三界流轉生死の惑業とは朗然たる大虛空に時到て自ら一片の雲を生し雨を降すが如ふ有にして有にあらず空にふて空にあらず妙其中にあり抑も真如界の中には生佛の假名を絶し平等慧の中には自他の形相なし若一念僅らに萌動するときは萬境波自ら起り妄念此と感し境界彼ふに應ず鏡の影を現し鼓の聲と生するが如し邪正善惡の念に隨て好醜の形影必ず應じ十法界の依正森々然として現ず經に云く三界唯一心心外無別法又曰く應

評ニ曰ク悲雨慘風言外ニ溢ル感慨萬ダ懐然疊轉

觀法界性一切唯心造とあり抑も直如性空の體性は水の如く無明妄心の動相は波の如し深義宜しく須らく研究をべし其生死の惑業たるや情緣に繫縛せられて骨肉を貪戀ふ妄りに人我を認めて勉めて恩怨と修し清歌妙舞品行彈絲意を娛はしめ愛著と發し水陸の群生を烹て以て甘旨とし口服を養ひ惡口綺語兩舌妄語貪瞋癡愛みなあれ生死流轉の惑業なり」此一段主法

評ニ曰ク此處十二因緣ヲ說キ出シテ前言ヲ轉換ス奇想々々

蓋し一心の全体は性と離きて物に應し外の善惡邪正是非得失に對して心れ作用あるなり悉く唯因緣和合のみにて其實体なく其主宰なく朝より暮ふ至るまで業相ふ役使せられて自から自由の分なく生より死ふ至るまで業相ふ役使ぎられて自から自由れ分ふし悲ひ哉隨處ふ主となり到處ふ解脫する事能ふず其生死輪廻れ行相を攝ふ之と十二因緣と云ふなり曰く一ふは無明是れを過去一切れ煩惱と通じて無明と云ふ未だ曾て知惠あらざる故なる二ふは行これふ無明より業を生じ善不善れ業能く世界の果報と

作るが故に名けて行と云ふ三に識これは行よりて垢心を生ず身因犢子に母と識る如く自から相知ると云ふ是則ち父母交會の時男子と母に愛を起こす女子に父に愛と起を了別に識なり四に名色これと父母赤白二滴和合して托胎するの色陰なり五に六入とは眼耳鼻舌身意と六情根を成すなり六に觸とと根と塵と識と合すると觸と云是と生れて二三歳の時なり七に受とと外の六塵内と六根に觸れて苦樂と領納するなり五六歳より十四五歳に至るまでの形勢なり八に愛とは受の中より愛心執着の心起るなり九には取とと渇愛の因縁より四方に馳求す増上の愛著を生するなり十には有と云ふは三業に經て種々と業と作り業感と因と成就し因能く果を有持する事と結すると云なり十一には生とと有より還た後世と五陰と報身を受くるなり十二に老死とと生あれは必す死あり五陰熟壞して種々の憂惱を生ずるなり是を生死流轉感業の相と云ふ嗚呼悠々たる三界流轉の人苦樂心を縈し生死念を結ひ解脱の妙門あるを知らす朝より夕に至り生より死に至るまで念々作々感業苦に使役せらるるれみ悲ひ哉」

評ニ曰ク此所詞氣深闊

此一段客法

深信の人と是に反して十善を心として六度と行として日々怠らざる者と念々彌陀身心寂光此座と動せすして善業成就して往生極樂なるものなり人々宜しく善業と相續をべし種子生現行々々薫種子爲正と相續して窮る事なければ人々善業と相續して以て流轉と感業と輪廻と苦惱とと斷盡することを勉むべ死なり」此處湊合

○極樂地獄と法話

夫因果報應極樂、地獄と佛家の常談なり然して世と撥無因果の徒と往々之と無なと罵りて曰く佛家極樂 地獄と說く皆是れ寓言なり大いに愚爺

評ニ曰ク東雲爪ヲ現シ西雲鱗ヲ出ス蒼竜ノ如シ妙々

痴壊と誑欺とて設りゝ財施と貪求するの姦計れみ人死すれば形体斯ゝ敗滅し魂魄飄散とて燈火れ吹滅するゝ如ゝ何ゝ人の死ゝて極樂ゝ生ゝ歡樂を受け地獄に入て苦楚と受るれ理あらんや司馬温公も亦曰く死する者ゝ形と神と相離れ形ちゝ則ち朽腐消滅ゝて木石と同し神ゝ則ち飄ゝ風の吹か如く何ゝゝ之くことと知らゝと是思はざるれ甚ゝ知ゝ乃に何らす武不滌居士曰く天地の道對待ぜさるゝれなゝ陽あれゝ陰あゝ晝あれゝ夜あり暑あれゝ寒あゝ乃至明あれは幽あり人あれは鬼あり皆な自然にゝて備はる以て焉を偏見をべゝらゝを都邑ゝ人乃聚まる所冥府は鬼ゝ會を る所豈ゝ管ゝ人寰のみ有りて而して鬼室なからん哉幽明鄉と異ゝす人事と以て鬼道を測ることと得されと是必然の道理確乎たる定論なり日本紀神代巻に黄泉ゝ入て底根國ゝ適くれ語あり藤無良公指て以て地獄とす中臣祓にゝ亦根國底國乃語あり豈ゝ誣妄ならんや皇國神代鴻荒之世我が佛教未だ東來せさる時已ゝ冥府と言ふ以て明証とをべし高天原ゝ神家れ常談にゝて佛家れ謂ゆる極樂なるゝれゝ乎儒家の書にゝ因果報應天上地下の說顯昭著明ゝゝて六經等に散在を神儒佛の三道乃旨趣皆同一揆にして怪しむべからさるなり爾して神魂れ之く所聲も無く臭ゝなく窗々冥々沈々寂々とゝて心慮の計較する所ゝ非す言說ゝ窮盡をる所に非す只善惡の業風に吹れて之く所の妄境淨穢黒白負ゝ別あり決して地獄虛偽といふべからす神魂消滅すといふ可からす齋の范縝神滅論を著し鬼あることなしといひゝを曹思文先生祭祀ゝ禮を引て之と闢く晉阮瞻無鬼論と執ををい忽ち鬼來現して瞻遂に死を豈に偏計すけんや」此一段起伏法

評ニ曰ク以上邪說ヲ排擊シ去テ餘蘊ナシ以下上ヲ尙ホ收メ下ヲ起シテ自說ヲ主張スコレ直立千仞ノ狀アリ

夫れ游魂妄見の惡因ゝ依て惡報の妄境を感す已に妄境と感するとさゝ一百三十六地獄れ惡相分に應じて頓に現することと理當に爾るへし然ると世の接無因果れ徒は斷ゝて地獄なるもの無しといふて其實有を信ぜざるは

評ニ曰ク引証的確

愚もまさ甚だしといふべしおゝよ大夫乃著述せ玉好古隨筆より面白き一話あり請ふ今左に之を掲くべし」（此一段回環一線の處）

昔米澤藩れ大夫に萩原六郎兵衛と云る人あり藩主上杉鷹山公と輔佐玉て同家中興乃賢人なり玉一日同藩の子弟八九名来訪玉て茶話の序て談、佛法の事に及ひ地獄、極樂の妄誕不稽、和漢れ先儒、頻々と玉て其非を辨す抑も大夫の明斷、奈何と云ふ者あり玉かを大夫之に答へて曰く地獄、極樂の談は佛者に聞れて然るべし去なら強て御尋とあらば愚按を申すべし失れ地獄なり極樂なを諸子の申さる、通を必らず有りと云は信し難し又いかに和漢の先儒なればとて必らす無しと云るゝも彌々以て決しがたし何となれを共に見ざる處なればかり近く譬を申さんに人々腹中に蛔蟲と云へる虫ありて各〳〵妻子眷屬あり腹中を國とし家として栖めり此虫も諸子の如く腹中の外に國を玉と思はんが一朝服藥れ爲に下痢せられて忽ち別世界と見ると玉た大いに驚ろく事なべし諸子も亦た書を讀み文を能くを玉る玉此世界のみれ事にして死后を何なる世界に行く者ぞ量り難かるべし故ぞ幽冥の事を佛者に委ね置て士ゐるをのを唯治國平天下ゐ世間の事を專らと講したき事なを也云れたを」（此所直喩法）

評ニ曰ク寸鐵人ヲ殺スノ利アリ

嗚呼善い哉此言や大夫れ一言を誠に今時撥無因果の徒ゐ項門ゐ一針とを るに足れり要を玉る極樂地獄の有無を議して以て佛教れ大局面に渉り其深邃なる道理をを舉て之を是非するか如きは寔に凡情れ淺間玉き所より致ををのぞして世に此の如き邪見妄想を抱ける人あればこそ實に佛教も必要に玉て又佛教は因果應報極樂地獄の實有なることを談をるなれ若玉それ正見正知ゐ人計りならんにゝ佛教胡爲れそ極樂地極を談ぶんや況や因果應報れや〳〵（此所結束）

評ニ曰ク憂然語ヲ止ムルハ却テ餘意ヲ悟了シ來レル者アリ

評ニ曰ク此一段反映体

○不惜身命の法話

夫れ人身は金石よりあらす安う能く長しなへに持たんや人命は草頭れ露れ如きとはふれ猶ほ時を延るに似さり出る息入らざれば乃ち後世に属ぶ一念若し錯まりてゐ便ち六道に輪廻す佛教は廣きと雖ども其法要を生死と越るに外なし必らずきも生死無常彌陀の大願忽かせますべからす日々に来迎を持て往生れ遲きことと歎き夜々に佛名と唱へて凡身の久しきことを恨み又は生を貪り死を怖るゝことを得ざれ」起首破題法

評ニ曰ク経論ヲ引キ論敵ヲ設ケテ着々意ヲ敷衍ス奇想々々

十住毘婆婆論に云く死を厭つこと愛客の如くせよと又摩鈔に云く曉天を待つ商客は鶏鳴に驚ろきて猶喜ぶ淨土と願ふ行者は病患と得て偏へに樂しむと又永觀の拾因に云く病を衆生の善知識なりと又疑問鈔に云く死と怖れ生を貪ぼることと得ざれと疑者將た云はん我れ未た思れ如く如說れ修行となさは若き露命なくんば安くんぞ其志しと遂くるを得んやと或ひは云く度生の願未た半ばに到らす我れ猶ほ世に住せば其寺を興隆し其人と引導し社會に利益を與ふべしと余之れに答へて云はん此は是れ巧みの語句と佛法に寄すと雖ども心は實に愛我にあり未た佛法の道理と明かにして而して自利々他の大願を起せきにはあらす故にうれ言みな戯論に属を凡そ諸法は自性なし必らす衆縁に隨かふ若き因縁あれば縱令生と隔はも必らず自他の行願と遂ぐべし若き因縁少薄なれは千年の長生を得ると も願行成就きがさき淨佛國生成就衆生は菩薩れ大願なれ無盡の法界を以て國土となきに無邊れ衆生を以て所化となをべし何ぞ一寺一類れ衆生に限りてそれが爲めに身命を惜むべきや」此一段開闔法又設活法

評ニ曰ク此所回轉周旋

然りと雖ども尚ほ息れ出入する間は暫時も措かす衆生と教化し共に〳〵安養と期するは是固より佛子の道なれば彼の二乘外道の徒が唯うれ自安れみを計り妄りに灰身滅智を願ふが如き非法とな夢よと云ふにはあらさ

るなり」破題法を以て起り警策法を以て終る

評ニ曰ク妄語ノ二字本篇ノ骨子

○妄語の法語

世に妄語といふものあり蓋し妄語といい妄想心深重にして業障に覆蔽せらるゝもの、道に對して不真實を吐き及び自己の公欲に使役せられ他の人と欺かんとして妄りにつくる言葉なり然しこの妄語をいふもれは一時の欲と充し私くを足らまは甚はだ便利なるものなれと上下貴賤ともに容易に犯すもの多し蓋し其罪相犯結をいへと之を性惡と名け戒相を受し人も亦さ未だ授らざるもれも均しく重惡となるものにして夫の西書にも妄語をるものと鄙しめて無勇無力卑怯惰弱の至れるものと誡しめたり況んや出世無上の佛教に浴する人も甚だ之を厭離せさる可からす譬へは阿片烟草の如きその之を喫するや一時口に甘く神を恍かし實に人と

評ニ曰ク氣骨俊健

て快美にたえざらしむ然れども人の見て速に之を棄捨するは只に己の人身を殘なひ性命を損するが故なり而して人も妄語に於るや更に之より甚だしきもれの阿片も如き其害纔に一身丹止まり啻に二七和合の形体を殘なふのみにして敢て法性の功德と損するに止まらさるものおれ其妄語も其毒はなはた大いにして現世に於ては人々の輕蔑汚辱を受け禽獸視せらるゝに至り數〳〵之と犯すやうれ罪相ます〳〵第八識上に黨深し終には設ひ諸佛薩埵れ攝取慈念もいかんしたまふこと能はさるに至り本自法性れ功德を滅却し法身の惠命とも斷絶せきをんとす嗚呼恐るべきも妄語の因緣なり嗚呼厭ふへきも妄語れ業報なり」此處起伏法

評ニ曰ク大妄語ノ解釋

妄語に二種の大別あり一をは大妄語といひ一をは小妄語といふ其大妄語とは道義といつあるものに為て彼天地も天神の造化せるものといひ又は皇國と二神の産成せし所と唱へ或ひは人魂を神に賦與せきれといひ及

評ニ曰ク小妄語ノ解釋

ひ凡夫にして我と解脫せり三昧と發悟せり實ま阿羅漢を證せり等といひ道を謬まり法と殘なひ乃はち自他の安心を毀るこれ之等れ比類を名けて皆大妄語となす其小妄語とを世の常相の詐僞にして知れると知らすといひ見さるを見たりと云ひ或ひた恥へき事作を犯して我た非すと覆ひ或ひた意ま善しと思ひて口に惡ためと唱へ又た惡なりと知つゝ善なまと詐わる等こき等乃妄語無量無邊にためて其相千差万別なりと雖とも咸これ名けて小妄語となす」此所抑揚法頓挫法あり

評ニ曰ク小妄語解釋ニヨリ更ニ大小両妄語ノ比較ニ語脈一線ル

蓋ため小妄語なるえのも各〳〵皆ろれ爲ゐする所ありて犯行せしものにためまゝ謂ゆる縉紳學士なり匹夫匹婦に至るまて祿位れ保持雷氣乃感觸ゆるひは虛名浮利を貪らんゝためる或ひゐ人と陷しいれんと欲し及ひ他人れ利益と已れに占めんとする等種々雜多れ原因あまて現行する所まためて其心術れ鄙野殘酷なる實に惡むへくまさ其罪相も重ためと雖とえ悉皆この形體の悲喜憂樂に就て已れと喜樂にして他の悲憂とは顧みさる悲心より起發する者なれは彼の法性の道義と殘なひ身法の惠命と損し以て二世れ安心と誤了するか如き大妄語に比すれは其罪稍輕ためと謂ふへし」此所關鍵法

評ニ曰ク此處然ノ字一轉極テ力アリ

然るま目今世上の道俗多少れ人々を大觀するま小妄語の卑まし毛惡むへく且つ厭ふへきことれ從書至夜ま眼に觸れ耳に滿るすら尚ゐ恬然として之と省なるま遑まなく或ひは浮雲れ利名を求むるか爲め或ひゐ自己の活命の爲に自ら欺むき他と欺むきて揚々たる色あるの如きえの往々これあまに況んも彼れ大妄語の大罪たるゆよ〳〵之と遠離をへまを棄捨をへきを悟るもの能く幾人かあらん啻に之を悟るもれあらまるれみならす却つて邪說と稱讃して自教れ害たるを知らまるもれ居多なるが如し嗚呼夫れ薄福衆生にして是の如くなるは誠に哀憐れ至りなり然るま宿福深厚なる大人君子にしまま或た是れ如ゐ顚倒あるは抑もまた何の謂ひなる歟噫」此所收束

評ニ曰ク針線ノ密縫合ノ精敬服々々

評ニ曰ク一輪空ニ當リ彩ヲ揚グ

○想像の法話

人間万事想像のみ智と云ひ能と云ひ道徳仁義と云ひ學術技藝と云ふも皆たゞ想像に過ぎざるなり想像とは思ひ違りと譯しこの物は斯るものならん其事は然するものなり等已れの了簡れ及ぶ限りうれ物事れ體相作用等と思ひ違る心は妄動妄斷を謂ふ然れば世間の諸法は假令真實を認め究竟と爲し事物れ本性本體を識了せりと思ひ違るとれも之を般若波羅密よりむれは至竟一時れ妄想たるを免がれさるなり「此處入手想像の二字を以て起り疊々同字と

般若は梵語にして智慧と名く智恵に真智妄智權智實智れ差別あり而して尋常世間の智慧なりと思ひ違るものは學問技藝に通ず思量分別を明らかにす他れ痴愚魯鈍なるものは超過せると謂ふものなり國覺經に曰く智慧愚痴通ずて般若たりと蓋し此金言の意を愚痴と改めたるを以て未た真實

評ニ曰ク起首疊々同字ヲ叙シテ下ニ去來ノ辨ジリ毫モ滯リナシ舌頭ニ見ル

の智慧と名くべからす無明業識の妄動に依て圓覺大智のうちに智慧愚痴の二相をみる即ち是れ妄想なり此妄想れ上に住着して愚痴と棄て智慧と求めんとするは尤とも妄想の甚しきなり況んやうれ妄想上に求め得さる智識と以て之と真實智慧なりと思ひ違るに於てをや「此所抑揚法」

古人曰く道は知にも屬せず不知にも屬せす知はこれ妄覺にして不知はれ無記なりと然るに學佛れ往徒々知解を以て道を得たりと思ひ違ひ或ひは空寂と喜びて菩提と思ひ違るもれ多し誤まれるれ甚たしきなり道は智解を以て得べくんば何ぞ不知に屬せすと言はんや「此處警策法」

夫れ無常れ理と知て因果の旨を了て世間れ名利を捨て出世の寂靜と樂むは固より尚とふへき事業にして之と世上痴愚れ人に臨むれは智慧れ人と稱すへしといへとも此分齊に安着して知解或ひは空寂を以て菩提道と

評ニ曰ク舌頭五彩陸離

評ニ曰ク此處此篇ノ眼睛

なをに至らは佛法もまた妄想中の一分に過ぎざる思ひ違りと爲り了らん
如何して真智を覺了ゐ乙萬法と胸襟に歸ゐ乃至佛果菩提と成することを
得んや三賢十聖乃菩薩或ひた如幻智を證ゐ或ひた無生智と得るも亦さ未
さ佛果を成ることと得す等覺の地位ゴ至乙て漸や乙前れ三賢十聖乃諸
智と乙に忘すると金剛喻定と名けこれ時大智始めて現前をることと得る
之を佛果や稱し菩提を證すや名るなり豈凡夫情識れ妄動さる想像と以て
ろれ邊際とも測ゴ知るべ乞所ならんや」此處伏中ノ起
然りと雖ども情識妄動の凡夫と棄て別ふ大智發覺の聖者を求むへきに非
す蓋し大智や乙即はち人々各自本來具足れ大智のみ然れば最上利根れ機
乙三賢十聖等の陞級をも履ます直下ゴ本有の大智に契當を之と一超直入
如來地と云ひ初發心時便成正覺や云ふ謂ゆる知ゴ屬せを不知ゴも屬せさ
る圓通自由の道體こゝゴ於て乎初乙えて顯現することを得るなり」此處起中ノ伏

評ニ曰ク此所雲チ起シ雨ヲ呼ブ

評ニ曰ク狂瀾競起霆擊電閃

然ども中根下機れ衆生に至りて乙直下ゴこのれ最上乘に投入すること
能はさるのみならす想像の智乙なはだ盛んに乙ゴ業識の妄動しばらくも
止するおとおく愈〳〵想像すれば愈〳〵道ゴ遠ざかゴ或ひた知解ゴ着し
或ひは空寂に安んじて佛祖の境界を思ひ違るのみなればこゝふ於ゴ六度
万行れ設け五十二位の差定な乞ことを得す蓋ゐ皆中根下機と誘導して彼
岸に到着せゐむるの船筏なるのみ船筏は彼岸に到れば既に無用に屬すと
雖ども其初め船筏と得て之に乘ゴ當り船中れ規則航海れ線路を審びら
かふせさるべからを颶風の備へ破摧の虞なかるべうらを然り而ゐゴ既ふ
彼岸ゴ到り得るや上來れ諸〳〵れ方法皆無用ゴ屬するが故に亦た決ゐて
之に愛着すべからす若ゐ之に愛着ゐて船筏と棄て去ること能ゐをんば是
れ未た彼岸の人ならさるなり未た彼岸れ人たること能ゐすんば何ろ此岸
れ人に異ならんや三賢十聖は既ゴ殊勝れ船筏ゴ乘り彼岸に到り得さるふ

似たるを雖ども尚ほ船中に住着して未だ之を棄て去ること能はざる故より未た佛果に證入をるを得ず是れ皆想像れ爲に羈絆せられて非常の英斷に之を稱呼するに足るものなりと雖ども之と妙覺に臨むれば亦た唯思ひ遣りの稍勝れたるのと爲すまでなる想像を脱するの道また難い哉」（此一段波瀾と起して以て湊合す）

○第七章　落語門

佛事門中一法を捨てすと、然らば則ち、狂言綺語も亦た是れ聖諦第一義にあらざるか、若し夫を狂言綺語も亦た是れ聖諦第一義なりとせば一間棒腹絶倒をべき落語の如きも、説教法話の際に資て以て其説教法話と輔くること豈に鮮なしとすべけんや、是れ著者の特に茲に落語門を設けたる所以なり讀者幸に此意を諒せよ

○馬鹿正直な葬式の請合屋　葬式請合屋は虚言を吐く事を知らぬ人達なり或る紳士が京橋の葬式道具屋に到り葬禮一式の入用品を誂へ「藪井毒庵先生のお指圖で此方へ參りました」番頭「いへ〳〵藪井様は御自分の爲された跡片付を皆手前共へ御遣はしでございます

○生者不幸死者の幸運を羨む　露西亞にても小兒の早世をる者甚だ多く生れ子百人の中六十人迄は悉く五歳前に死亡するよし然るに承われば無事お成長して丁年以上の年齢に達したる人々にても大抵は皆死兒れ幸運を羨と云ふ

○鶏　前の鶏「ソレ又あの女が己ら達を此畑から逐ひ出さうと遣ツてござたつそ後れ鶏「さうだ〳〵ソレ小石と拾ツたぞ早く逃げ出すべきだ

正直ハ世ノ尊ブ所ニ地ノ雖ト時ニ場ト合ト見合セ言語ヲ使用セサレテ底ニ正直ハ到ル上ニ馬鹿ノ二字ヲ置カレ得ルナ然ラバ則チ素ヨリ虚言ヲ言ハ悪シキ機ニ臨ミテ使用ニ要用ハ實ノ言語ナルカ乎

ナニ此處にぢつとして居玉へ「うれでも此方に狙ひと付けて居るしやお
いか「だらよ脇に除けて御覧此度中るはな
○自から高ぶる者を却て人に卑ゑめらる　お倉(自分では二十歳と唱
へ居る別品)「マア御聞さなさいよ、アノお丸婆々めは虚言ツつ抔なおと
、申したら甚助さんは子私の歳を二十五だと云ツたさうでをよ、うれじ
やアまんまる五年間違ツて居ることはアノ婆々面めも能く知ツて居まを
のだは、助四郎「ハテナお倉、まさかおまへの心え丸ちやんがお前は歳を
三十でございますとすツパリ云へバよかツたといふれしやあるまい
○品物を賣て後ち代金と請求する　女房がイヤをかぶるの其場合はハ
イと素直に返事したらは決ゑて油斷すべからず是れぞ亭主ゑ反物新調れ
内談を目論見最中れゑるしと心得べし
○惡少年の遁辭　或るゑんばく小僧が水泳さは往ささいといふと親え
自カラ二十歳ト稱シ丸ト二十五ヲ稱ヘ助四郎ト三十ト稱フシ八ヘ語ル年ナル毎加ニフ換ヘシ吾ム人ノ罪ハ其ニ始メ人ニ自ラ因ミ
ス鳴呼人非ノ欺ヲ自ル歸ノ

親ノ慈悲モ水泡ニ帰ス

氣違ひ「水泳ぎは毒はなるから廢すがよかろうお前え今朝ころゑ腹が痛
いといふて居さじやないか「そりやそうてすが親父さん、私はお腹を上に
ゑを背中で泳くことが出来まをい
○勤勉家の祈禱の詞　或る勤勉家が祈ゑて曰く何時でも一寸半時間位
無駄は遊ぶ暇のある人の近寄らさるやう吾と護り玉へ斯る人は必ず何所
へか這入を込み用ある人れ半時間を一寸消費すゑ間違なけをえなり
○訴訟依頼者と代言人　訴訟依頼人「夫れでえ貴君え此訴訟と私の負
けと御鑑定でございますの　代言人「イエ〳〵決して〳〵貴君が敗訴なさる氣
違ひいでございませぬ何れ貴君れ御孫の代あたりで彌々敗訴と極まる位な
事でございませう
○伯母を甥　伯母「うれじやれ前いお金れ入るを死ばかり私と尋ねを
来るのた子甥無毒な顔付にて「それだツて伯母ゑん如何になんでえそん

貧窮書生ノ情態

田舎者ノ妙計都會人ナシテ一驚ヲ喫セシム

なに度々は參られませぬ者ぢ

○田舎人　或人田舎より出京したる朋友ゑ途中ゑて出逢ひ「ヤア此頃はどうなさツて居らツしゃるか先度の御書面で馬の事ゐ付角頓藏氏と訴訟中だを承たりましたが如何落着〳〵まゐさか」田舎人私ゐ大勝利頓藏氏に一と泡吹かせて遣ゑました、御承知でもございませう判事が古今無類の正直者てございますから手紙に添へて少々ばゝり金を贈りまゐた」或人「そんお事ぢ爲されさら不埒お奴を て大目玉を頂戴〳〵却てあなゝの負公事ゑなりうゐなものだと思ゐまをは」田舎人「其事でございますヨ若し其手紙ゑ「判事正直正兵衛様角頓藏」を書くことと忘れてツ井ゐツかり私の名前を書いて置さまゐたなら必すれ考への通ゑになツたでこさいまゐたろう、エ、どうでこさいます繩て首を縊ゑるゐでも夫を殺す法ぢ幾ちもこさいませゐがナ

○華族と僕　男爵華族「なんだと又新らゐゐ法被が入ると餘まりひどい〳〵貴様は三月目に一枚づゝ法被が入るゝ己れを見やゑ貴様れ主人たゝれで一年に一遍しか洋服ぢ拵へないぞ」僕「何も且那のお爲めと思ふからでこさゐます私か旦那の召しますゐうな如何な着物ゑ着まゐて忽ち旦那のお顔ゑ係ります

○和尚れ說教誤解れ話　或る和尚ゝ去る日曜の說教ゑ「同行衆や一寸上邊から見渡ゐさ所ては諸れ物は皆奇麗て聊ゝ子細ありとぢ思ぢまゐせぬかよく〳〵中と覗いて底まて詮索致ゐゑ見るとイヤハヤ凡夫の淺ゐしゑ詐偽と卑劣ゑて一杯ゑ塞かつゑ居る事か分りますゝ云々と諭されまゝさゝ吾れ〳〵ゝ竊に案ぜるゑ此和尚殿ぢ蜜柑と箱ゑ買ひたゑ相違ないと思はれます

○田舎者と鐵道役人　田舎者らしさ人ゝニウヨーク府ぢ鐵道停車場にて

僧一体ノ歌今日ニ曰ク今ハ明日ニ曰ク日暮ヲ悪ルクハ善ヲ人ノ口ニ言ハメシモノ世ノ中ニ善ヲ悪ルクハ惡ヲ一所ノ古今ノ虚ヲ識見ト職ノ者ノ思ヒ想ヒ更ニ復タ妙ナリ

時間ノ短ナルハ急行列車ナリ　賃金ノ高額ナルハ里程ノ遠ケレバナリ　能ク田舎者ヲ持シテ筭ヲ細ニ思セハ更ニ里數ノ長クシテ且賃金ノ速ク且廉ナル再ビ可カラス　衰貶毀譽ハ實ニ慎ムベキ一言ナリ　過マレバ如何ナル迷惑ナ

鐵道の役員に向ひ「アルバニー府まで道程はどれ位こさゐますか役員「百四十四里こさゐます」「田舎者「何時間かゝり升う」役員「急行列車で三時廿五分かゝります」田舎者「ろて其賃錢は何程てすか」役員「一圓四十四錢てこさゐます」田舎者「エゝ、僅か四時間足らず車に乘るのゐ一圓四十四錢かゝりますとへ驚ゐたものてすな私等の田舎てを半日鐵道ゐ乘て居ても一圓四十四錢なんとゐふやうな滅法な金はかゝてやしませず又百四十四里なとゝろんなゐ遠方まて連れて行かれもしませんを

○病者と朋友　或人重き病ゐ臥しけれる女房并ゐ平生より親しき朋友なと枕邊と去来ず看護に手と盡しけり或時病人と慰めんとて、朋友「こんかに深切な女房を持つた男はほんとゐ果報者てすよ」女房「ろれてはあなたもれ娶をれ貰ひなさツてはとうてす」朋友「私もそれと考へて居ります、一人私の目を注けゐ置いた後家さんがこさいますから」病人恐ろゝさ辭ナ來スモ知ル可カラス

まて「後家さんへ已れはもうとうて助からぬかす

○代言人と證人　代言人裁判所にて證人ゐ向ひお前の宅ゐら其居酒屋まて何町あゐますか」歩行いゐ何分間かゝゐますか」證人「左樣其時間は往さと返ゐとに依て大造相違しますのどちらの方てすか

○婦人の自惚　れ倉「今日平三さんが或る所て私の噂として大造嬉ゐいお愛相と云ツたそうてすヨ」れ悦「さゐかエとんな事を」お倉「昨晩乃宴會ゐ東京第一等の大勢の美人の中に墨津れれ倉さんが居たのを見さと平さんがさう言たさうゐすゐ」れ悦「アゝさうかエろれなら私ゑ其時氣が付ゐさの

○馭者と役員　一人の男馬車會社に到り何卒召使ひ玉はれとの依頼に役員「お前は御者れ術を知ゐて居るか」男「能く存ゐて居ゐまを」役員「お客は誰れてゑ皆丁寧ゐ取扱ねばならぬがろれゐゑ承知か」男「勿論てこさ

自カラ人ニ對シ慢言スレバ人亦之レニ對シテ慢言スルハ一般ノ人情ナリ然ラハ則チ人ノ慢言ヲ聞クト思ヘハ必ラズ慢言ヲ爲スベカラズ

人トシテ此三問ヲ能クスレバ立身出世期シテ竣ツベキナリ

世ノ末流ニ當ツテ人情ノ浮薄ニシテ且ツ狡猾ナル想ヒヘシ看ル

います」役員「又其上ゐ正直てなくてはならぬぞ例へゑ申せばれ前れ馬車かられ客が下ゑた其跡に紙幣一萬圓這入つて居る懐中物が落してあつゐ時にはれ前いどうするつもゑう」男「其時ゑとうもしませす唯寝て居て利足丈けて暮らしと立てまゑ」

○祖父ゑ孫の話　祖父「坊やお前いれ父さんやお母さんがれ前乃欲しゐものを下さらぬとゐふと何時ても大きな聲と出ゑて泣くのが癖たが誠によろゑくなゐ子お祖父さんとこ覧な色々欲ゑゐえれがあはて貰はれぬ時があるけゑやもお祖父さんは一度もお前のやうに泣いたことはなゐヨ」孫「お祖父さんちよいと一遍泣いてゑ覧ナうゑころ此度どんな物てもお祖父さんの欲しいものが貰はれるヨ

○學者れ名言　或る學者先生ゐ著ゑたる童子訓ゑ曰く斯クセヨ又斯クセザレト親達ノ言付ケタルキニ其何故ニ斯クスベク又斯クスベカラザルヤヲ問返サヾルガ子タル者ノ道ナリ云々と成る程これは名言なゑ蓋ゑ親達が子供に指圖れ其度毎に一々道理を問乱されてこれに返答せゐはならぬとゐりゑは聊か心配當感すべき意味合もあるべければなゑ

此金言ノ金言ナルヲ所以ナリ知ラントセバ先ツ須ラク子女養フヲ可シ

○英國人形賣　英國にて國會議員改選の際或人形賣ゑう籠一杯に人形を入れて群集の中と往来し「保守人形々々々々無類上等の保守人形をれ器しなさい」ゑ呼ひ歩き居たゑ數日後ゑ此同ゑ人形賣が群集中或る自由党候補者れ前ゑ来り「自由人形無類上等の自由人形目出度い自由人形とゐ召しなさい」といふを聞きて此自由党員少ゑムツトゑて「なんた此盗人めが一昨日ころ手前ゑろの人形を保守人形といふゑ賣つゑ居たじやないう」人形賣り「且那の仰ゐ通りでこさゐます一昨日まてゑ此人形がみんな盲目でこさいまゑさか唯今てゑ此通りにみんな目が明きまゑた

○振部氏の妙な問題　昨夜振部金助氏が胸ゐ一個の大問題と藏めて悉

昨ハ非ニシテ今日ハ是ナルヲ覺ル

第一問衆人驚カシメタ　疑問衆人ハ第二笑ヒナガラ自分ニ言ヒ而ルシテ振部氏ハ今一人ノ其ヲ知ラズ若シテ知ラサルヤ来タシ可カルナリ

き集會所に入来り並る少年に向て「若し僕が逆立として頭と疊に付けて居れば忽ち頭に血が溜るだろう」と何か謎様言掛ける様子ゐ並居る少年は皆其通りと答へて一人も異説を唱ふる者なき振部氏得意然として更らに言葉を續き「うんならば今僕が此れ通り足を疊ゐ付けて立ゐ居るのに何故此足に血が溜らぬだろう一少年傍らより「うりやよく分ツて居るサ頭と違ひ君れ足い空虛でなゐから」此返答ゐ一同手を叩いてドツト笑ひたりきが振部氏一人え此口上が何で左程ゐ面白いやら分らざりしとぞ。

○老人が甥と戒める詞　或る老人が若い甥を戒めて「何處で遊んでも歸る前には必す拂ひを濟まして来るもれだゾ」甥「うきても伯父さん拂はう金れ持合せがなゐ時はどうしませうか」老人「其時を歸ツちやならぬ

○醫者と書生　書生「オイ〳〵藪井君大造ゐお急ぎだナ」若い醫者「今病家から召びゐ来て驅付けてる處だ」書生「アヽさうかエそれぢやろうんな

藪井君ノ答辭案外ニシテ人ノ意表ニ出ツ

ゐ急かすとえ善いい僕と一所に一寸向ふれ麥酒屋に寄て一杯遣ゐ玉へ」醫者「イヤ〳〵とんてもなゐうんな事をして居る間ゐ病人か快くなって仕舞ふハサ

○教師と生徒　体操れ教師生徒に向て体操ゐ利益を説くとて「凡ろ世の中ゐ体操ゐど身体れ健康によいものはあるまゐこれをするゑ体力か増して壽命か延ひて〳〵〳〵」と云ふ時生徒の一人横合から口を出し先生近来ころ体操など〳〵色々な事か始まりましたゝ今から百年え前の人にえ体操など致した者は一人えおさひませんろれでも〳〵〳〵」教師得意な顔色にて「そうでこさる我々の祖先に体操を勉強しさ者とゑは一人えこさゐまゝんそれだのらこ覽しろ皆死ゐまきた一人も今生きて居る者はこさゐませんえ」

教師体操ノ効ヲ解クノ一言ハ實ニ虛生徒其虛ヲ取リテ之ヲ駁シテ教師屈ヲ狐理屈ヲ述フ如斯教師ニ就テ体操ヲ學ベハ却ツテ不健康ノ身体トナルモ知ルベカラス

○與様と下女　與様「アノれ隣の女中お前お宅ゐ歸ツたらば子今度の

人ヲ使ハスルニテ却ツテ空言ヲ於テ空言シカラズ

或人ノ經驗ニ由リテ見レバ眉及ビ頭髮ハ毛ト同ジクリヤ幼時ヨリ之レ然ルニアリ髮ヨリ後ニ白ク化シテ見レバ此ハ理合ヘルニ云フ

日曜ヨは何にも致ませぬが夕飯を差上度うございますから旦那と與樣と御一所ヨ此方ヨれ出下さいましと左樣申上げてお呉れナ」下女「旦那ヱお出になりませうが與樣はれ宅とれ外づしなさることヱ出来ますまいよ」與樣「さうゥエ小さいお壞さんでヱれ鹽梅が惡いのかエ」下女「イヽエ御病人ヱこさいませんけれどヱネ今度の日曜はわたゑの宿下りと致ま客の日でをから

○頭髮と髯と年齡に相違ある話　人間れ頭の髮ハ何故顏れ髯よりも早く白毛ヨなるにやと最と不審を抱く人あれどヱ髮と髯とは其年齡に二十歲の相違あると思へは何も不審なる譯ヱなし

○老女と植木屋　心配性の老女「植木屋々々々アラ〳〵あれとお覽ヨ何處ゥの少さい子がお前ヨ鑓を遊道具ヨまて居るヨ」植木屋「有難うこさいまを御隱居樣ナヨ構ひませんヨ何んな少さい子ヲヱ迚ヱ鑓ヨ疵は付け

物皆應分考ヘサセ之ヲ爲ハ徒ラ勞シテ鮮ナク實ノ益多シ世ヲ望ム大業者ヲ是レ宜シク等ノ言ヲ玩味シテ方向ヘシ定ム

大將ノ意ニ常用ヲ寒ニ斯ノ如ルヘシ

得ませんヨ

○朋友の婚姻　至極男振ヲのよろしからをる人或る友人に向ひて甲君ヱどうして細君を貰ひ出ゑたか子」乙「斯ういふ譯サ最初已れの欲しいを思ふ娘とどうゥのおして貰ツて遣らふと色々エ風したがドイツもコイツも分らぬ奴て急に埒が明ゥねエハサ、ソコデをゞのつまりに已ヨと欲しがつて居る娘れ方に方向を轉して相談を始めゑ處が案しるよヲ産むか易いで即坐に埒か明ゥたゥサ

○遠慮　足下若ゑ途上ゑて知人ゥ邂逅〳〵最も懇切ヨ待遇せらヨて我兩手ヨ握り〆めゥれたる時は（我錢入れれヅボンれ隱〳〵ヱ後ゥ方ヨ口の開き居ることをれもひ出ゑて）連れの惡漢が後ヨ廻はり居りをせぬゥと先つ後邊を顧みるか尋常の手順おり

○酒屋れ主人と客　酒屋の主人或る常得意の客に向ひ貴客も酒さへ吾

あのらずに居さならば今頃も大造な御身代て二足引の馬車ゴ乗ツてお通りなさる御身分てあらうに」吞助「そしてれ前も酒さへ賣らずゴ居たならば今頃も已ら弘馬車の上て御者をして居るさらうゴ

○若夫婦　若い亭主「鼈甲の櫛笄ゴまるゥ工珊瑚樹れ根掛けゴするのエ又は金無垢乃中差ゴまするかヱどれモもお前の好きおのとお撰りナ若い女房「良人、成る丈け無駄なれ金と遣はないやうにせなけりやいけませんヨアノ私は斯う思ひますはぎんな物と一ツづゝ買ゑないて三ツ一度に取るの善うこさいますヨさうすると此度小間物屋か幾許か代をまゞまをハネ、ソラ私ゴ言ふ方か餘程倫約てしよう

○書生と醫者　書生「先生貴下も餘程れ顔色の惡い」醫者「ハイ過日来少々不加減て」書生「誰れにれ見せなさツされ」醫者「イヤ自分て療治して居ゞはす」書生「ハテそれても自殺事件てこさるナ

○佛國れ外交家と詩人　或る詩人か佛國近世外交家れ泰斗タレランド氏と共に市中を散歩する折自作の詩を得意に吟誦して行く手の方に一人の男か欠伸して居るをタレランド氏を目早く身付て連れの詩人れ袖を引き「コレろんなに大な聲と出し玉ゆなアレ見玉へ向ゆれ男か聞て居るヨ」

○双子　學校教師新入れ生徒甲に向ひ「お前さんれ御名前と年齢は」生徒甲「蓮賀阿武太郎十七歳」教師次に新生徒乙に向ひ「お前さんは」生徒乙「蓮賀甲子次郎十七歳」教師「御兄弟てすの」生徒乙「左様てこさいまを」教師「フーム双子て入らツしやるゥ子」生徒乙小首と傾けなから「先つ左様てこさいます親父の方から申すと双子てこさいます私共も盥湖（一夫數婦と公認したる米國の一地方）のら參りました」教師ア、成る程」

○画師と縱覽人　繪画共進會にて或る縱覽人一個れ画れ前ゴ立留まて「こりやおんたこれても画てこさるとゆふれか驚たナア幸ゴ無落款たが

詩人ノ大膽外交家ノ謹慎傍聽人ノ無神經

我國ニ於テ甚タ稀レナル話

自カラ能ク其善惡ヲ知ルヤ

雖モ漫リニ之レガ評ヲ下ストキハ大ニ面目ヲ失スルコトアリ慎シマサルベケンヤ

若き名前を書入れろと云れたら八歳童何々寫とてもやらのすのだらう先生御鑑定を如何」と云れて隣りに居る人「甚た失禮てこさゆ升か其画は私の書きましたのてこさいます縱覽人「イヤてれたとんた失禮を申上げまさ真平御免下されまし内實私はれ恥ゥとなから画なとゝ事はとんと心得ませぬわんの素人てこさいまはから必ずお氣に掛名られまさな唯私た皆人れ批評して居るのを聞て一寸其口真似と致さた計りてこさいます

立君獨裁豈ニ立君獨ノ誤ナラズヤ

○父子　童子「お父さん立君獨裁といふた何れ事ですか」父「こりやむづかしいヨお前れ分かるやうに講釋とすることた迚た已れにた出来ないヨうれで子れ前が大きくなツて持參金のれ嫁を貰ふまで少し待つてれ居てヨ其時ゴあると立君獨裁の意味は獨ゲでゴ分かるから

若シ此哲學者ニ種子ノ効用ヲ質問セ

○哲學者の妙言　或る哲學の大家が曰く凡ゲ宇宙間の經濟に於ゲは一物として無に歸するものはなし例へは蜜柑の如しこれと剝いて中の實丈は

ハ必ラズ云ハンヤ種子ニ投シ火中ニ破レ裂セシメ八ヲ驚カスカ効ノアリトス

と食ふて口と濕はさ其皮は窓から投出さ海へ何の用とた爲さざりさ云ふといふゴ決して左にあらず下を通る餘所の男ゴ其上と踏ませて辷つゲ轉んて向ふ脛を打折するといふ一廉れ役目を爲すものなり

○紳士と美人　或る紳士が情婦ゴ向ひ「私れ斷言してれ前と美人と申しますヨ」婦人「アノなんてす子お前さんは心て左樣思はないてた口て左樣お言ひてさようし」紳士「而して私か口て左樣言ハないてもれ前は心て左樣お思ひてしよう

婦人案外ノ言サ聞キ定メテ落膽スベシ

○婦人と小兒　正味は何歳てあるゥ一時年齡の知れにくひ若作ゲの或る婦人の膝に坐ゲて居ゲ不思議さうに其顏と詠めなから子供「伯母さんは何歳さエ」婦人「さうさ子何歳ゴ見にるかエ、見にる丈けの歳たヨ」子供「さう、ろんなゴ年寄りかネー

○母と小娘　母（小さな娘ゴ向ひ）「れ淺モウれ前れ黙り、ろんなゴ饒舌

饒舌ノ人ハ矢張局ヲ結フ

をつけられては堪らないヨ、何と云へば口返答ばかりをして何時てもお前から先れに云ひ止めた例かないヨ」嬢「ろをや私の不調法じやこさいませんヨ、モウこれ切をお母さんの方は云ひ止めるのたといふことか一々私にを分りませんとれと

三百八

○懲張り爺の祝詞　或る所れ溜らねに、分らねに、下らねに、ゆ者好うねに、六てもねえ人情知らずの懲張り爺めが消防本署れ開業式の祝詞に左の如く述へたを　此場内の蒸氣ポンプを世上幾多の老處女ゆ如く常を其支度整ひ居りて終を其需用のおきを希望すト

○伯母と子供れ話　伯母さんれ差圖を從ひ子供皆々夕飯の膳に向ひさると云伯母「オヤ誰れたか此お芋の煮たのをいぢりまをたネ、誰れさエ」（黙坐寂として一人の問に應ずる者なを）善坊お前じやなゆか エ「善太郎れ父さんがれ飯をさべる時れれ話ををるものじやないと云ひまをたヨ」

善太郎ノ一言ヲ聞キテ其所爲ノ善太郎ナルヲ知ルニ足ル

實ニ妙言

通常人ヲシテ此問ニ答ヘシメハ必ズ云ハン毎月其余金ヲ貯蓄シテ多クノ額ニ至リテハ吾又之ヲ出シテ使用スベシト

○夫婦差向ひれ話　火燈を頃夫婦差向ひの時、女房「家の暮をれ爲を毎月六十圓つゝ渡をて下さるとして其中らとうなり私か儉約して毎月十二圓づゝ餘ますとをたらばあなたをマアどうして下さるてしよう、亭主を斯ランポに火を移しをゝら佛頂面ヨを「どうして呉れるかとエ、夫れは何んれ事た吾れゝ固より一箇月四十八圓ところ云ふたてはないか」

○漁船の緩急　須美洲を斯藏氏か此程米國より歸朝をたる或る華族れ興方に向ひ「サンフランシスコ」より横濱まて太平洋の航海ヨを幾日お掛りてこさいましたか」興方「十八日かゝりまをた」須美洲氏「ろれを大造れ早い先頃私の弟が米國へ參りまをた節を丁度廿日かゝをまをた」興方「れ前さんれ弟御を大方下等室にれ乘ヨをなさつたれををやう私共は上等室ヨ乘りましさから別段に早うこさいまをた」

○中惡しき亭主と女房　亭主不興れ体ヨて此度女房と睨み「十一月十

地獄ニ赴クノ漁船ニ於テモ未タ此ノ如キ例ヲ聞カサルナリ

三百九

五日と如何なる惡日ぞ五年以前お前と二人て三々九度をまた彼れ十五日か怨めしいと云はれて女房は落付顔「マア勿体ないこと仰ゐやはますヨ長い月日れ間お互ひに嬉まいと思ふたはさつさ彼れ十五日ばかり大事ぢ日じやこさいませんか

○ヤリクリ商人　甲「世の中は錢と借るよりか未た外にけらい苦まい情けない事が外にあるか」乙「あるとも其借財を濟す事ヨ」

○新造と下女　御新造（来て一月ばかりになる下女に向ひ）れ慶お前は今朝未た座敷の掃除としない様ぢやないかエだつてこ覽ナ向ふれ隅に蛛の巣が殘つて居るちやないか下女「私は存しませぬヨろりや大方先の婢が殘まて置いた蛛の巣てしまう

○亭主と老婆　亭主が或時我女房の事を老母に導して「内れれ丸は兎角物事丹尾鰭と附き何か御山は申しまなりませぬどうかあの癖を直させ

（丸ハ自分ノ年齢ヲ語ラスノ老婆ノ）

妙計絶妙

たいもぢてす」流石と老母なまを即答して「お丸に自分の年齢の話をさせてこ覽一度て直まをまよう

○探訪者と紳士　或る新聞の探訪者が有名なる某紳士に面會まていふやう共同相場會所の事ゐ関し御意見を伺ひ度存じます」紳士こまを聞て眉と顰め暫ま考へてさて答ふるやう「ろれはお斷たり申しまま私と新聞記者へ向て彼是と說と述へられと新聞に記載して貰ふ事は甚さ迷惑に存じます併し新聞に記載をるてなしに唯内々私れ意見を貴君まて申上る事なまば差支えこさいません」「承知致まます」併ま念れ爲に私の申上る事又と其大意とも紙上に御記載ちさらぬといふ御誓言が望まし存まま を」「誓ま記載は致まません」斯て紳士と十分に意見を吐露し了りたれば探訪者は重ねて又決して新聞ゐ記載せさるべしと約束まて相別れさり翌朝紳士ま新聞れ配達と待ち無ね取る手遲まと其新聞紙と開きて○共同相

（探訪者ノ聞クハ實紳士ノ謝絶スルハ虚）

（内内ノ二字後ノ証佐トナル）

（誓言ヲ望ミ証佐ヲ固クス誓テ記載セサルノ一言探訪者ノ實ヲ固フス）

紳士翌朝新聞紙ヲ待チ兼ルハ則チ自カラ虚ナルノ第一証

虚ヨリシテ見レハ實ハ悪ノ如シ

紳士自カラ誓言ヲ破ル

結局ノ一言自カラ虚ヲ見ハシ探訪者ノ實ヲ罵ル

場會所ニ關する某氏の意見と題する見出しを探せども一向に見にず細君傍より「何と探がして居らつさやるの」紳士新聞紙と坐に打ち付け「ナニ何てえないよをいふも新聞れ探訪者といふ奴は少さも信用が措けない」君細「何ぞ何なたろ御話なさつさ事ても新聞ニ書ま去さか」紳士「イヽエ何んにえ書かない」細君「うれぢやよいではこさいませんう」紳士「イヽエ甚さよくないマア物をよく積えつてこ覧な人に二時間もなか〳〵と話をさ勞て置きなからこんな失禮なあ去らひと去てうれて濟むうへ全体新聞ふは探訪者の已れ丹遇けて說を伺ひ度といふさけれとえ已れか承知しなうつたと書いて置いを外ぶ所に已れの言ふて聞うせた通ゑの事を委しく書くう本統たワイ新聞れ探訪者ゐと鼻撮みなものうある もれちやない」

○女房天下　　亭主買ひものをり歸り来り女房よゑ頼まきたる買物と渡すと見るに如何ゑも買ひかぶりたるいかさま物なれば女房え大にせき込

亭主女房ノ言ニヨリテ已レノ愚ナルヲ發明シ竟ニ女房ヲ買ヒカブリシ事迄ヲ悟得シタリ

冒頭ノ言甚タ曖昧ニシテ讀者ヲシテ妙ナ心配ヲ起サシム

み「私は生きてからお前さんのやうな男と見た事かないヨ是迄私の知つてる事て何事でえお前をんのだまされおかつあ例去のないよ」亭主「たまされないさめ去かないに」女房力と入れて「ハア何んても」亭主「れ前れ言ふれか虚言てないやうた、こいつ買ひかぶつさなと婚禮れ晩以来始終已れえ疑つて居るんた」と言ひつゝ二階の障子と開けスワとふとき何間飛ばねばならぬか逃け路と測量去さり

○酒顛童子　　或る禁酒會員か酒顛童子の末孫ニ向ひ「君えなぜこんな織らはしいえのをお飲なさるか」上戸「齒て齒むほとにえ固まつて居ませ去ら止むと得を飯みます

○女房の馬鹿らしい心配　　若い女房「アノ今アノなにかれ前さんに遇ひたひとて坐敷に通つて居ますよ」亭主「さう誰れさに」女房「アノ斯う申去てはお前さんのお氣に障はるかは知りま丹んか此間かられ前さんの咲

かとうゑ私の氣に掛つてなるませんろれにお前さんは平氣ゑ居て少も
も養生をなさらないゝら私ねと字も心配でならなゐてすよ若ゑ今れ前さ
んゝなくなをつたら私ゑとうしましよう」と云ひつゝ涙ゑこぼ
せば亭主ゑ慰さめ「れ前ゝ餘り私と大事ゑ思ふて呉れるのゝそんなをさ
らない事ゑ悔て心配して悲ゑくなるのゝた私はほんとに達者たからそんな
ゑ氣遣ひてないよ併ゑ念の爲めれ前ゑ心配させぬやうに一寸お醫者に見
て貰ひ悔しよう、ナニカエ今坐敷ゑ入らつゑやゝてるのは仙庵さんかに」
女房「イヽエれ醫者様ちやありませんよあれはアノ生命保險會社の手代
てす」

○廣告れ妙案　或る商人れ說に新聞紙よをも一層便利なる廣告法ゆあ
といへりゝは如何と聞くに此人我女房に向ひ「これゑ極々れ秘密なれせ
もれ前ばかりに明かをが實ゐ今我店にては、元價をくゞつて品物ゑ賣捌

物ヲ安價ニ售ルハ恰モ低地ニ井ヲ穿ツガ如シ百川是ニ傾クハ自然ノ理

亭主ノ返答甚ダ穩カナリ

女房ノ答辭案外ニ出ヅ

ルハ水ノ低キニ就クガ如シト聞ク然ニ元價ヲ切リテ賣ルハ則チ恰モ低

き居るなり」と云ふゑ翌日に至ゑ此事を言ひ傳へ聞き傳へて評判ゑ爲す
婦人は凡ゝ千人もあゑとなゑ

○リービングストン郡に獨身男子多し　ニウヨーク州リービングスト
ン郡の或る婦人を男女廿七人の小供とまうけさるよし斯る明白恐怖すべ
き統計れ有るに拘はらずニウヨーク州人れ中ゑ何故近來世に獨身男子の
多きやゑ疑ふ者あるは最ゑ訝ゝ去

○太郎　太郎「れ母さん今私ゑ五歲て次郎ちやんは三歲たネ何時まて
立つても次郎ちやんゑ方か年齡か下かエ」母「さうたよ何故カエ」太郎「好
い事ネゝれだと何時まてゝも次郎ちやんとゐちゑてやる事か出來るヨ」

○老人ゑ少年れ問答　或る飛脚船の中にて年老れ上等客三名小なる車
子ゑ取巻き骨牌ゑ始めんとしゑ一人相手の不足すれば何人ゝ呼入れんゑ
見廻はす折柄彼方より一美小年れ來ると見て老人の一人進み寄ゑ「若し

是等ノ問ヲ發スル小兒ハ普通多クアルマナルモ是等ノ答辭ヲ爲スモノハ甚ダ少ナシ

老人ノ第

一誘徒博第　少一答年ノ謝第　老二誘人ノ飲酒第　少二答年ノ謝第　老三誘人ノ喫烟第　少三答年ノ謝第　老四誘人ノ色情第　少四答年ノ謝第　老四誘人皆ノ禁物少年也　而之此少年ノ以ナ人ナ如辞主意老ルキスタ

誠に卒爾な事と申上ますが實は今骨牌をして遊ばうと申て人が足りすに困て居ります貴君何卒お這入り下さるませぬゥ」少年「有難うこさいますが私い骨牌を致しませぬ」老人「ろれちや酒と一つれ上るなさいまち」少年「あるかとうございますか私ち酒と用ひませぬ」老人「それぢや此煙草と一つお取りなさいまち」少年「ありのたうこざいますか私は煙草と吹ひませぬ」老人「イヤ是ち〳〵よいお心掛だ若い者ち左様なくてはなりませぬ、マア此方の部屋ふおいてなさいまち妻や娘も居りますからお引合せ致ちませう」少年「ありかたうおざいますか私は女房は貰ひませぬ」

○亭主の出立を見送る女房　遠方に旅立する亭主を見送りて今手を分つ時ゴ臨み女房「左様なら折角お厭ひなされまし而して私の事と忘れて思ひ出さぬぢやいけませんヨ」亭主「飛んてんないことを云ふれ前と忘れてさまるんのかエ」と云ひつゝ萬一の用心ゴとて太き紙小捻と拵らへま

ニ在ルヤシ

無事ニ因テ筆ヲ起シテ無事ニ因テ筆ヲ閣ス

吾輩ナシ善助ハ爲サシメ必ズ曰ハ寧ロ頭ト犬ナル鶏モ足ナ得ズタル

羽織れ紐ゴ結ひ付けたる

○女用文章の一文例　左に記するれれは或る婦人ゥ良人の旅行先ち出〳〵る文れ文言なるの女用文章中乃一文例と爲すに屈強のもれならん

一筆しえしら〳〵何も爲す事なきまゝ此文認め申候何ち申上る事おれなきまゝこゝに筆とめ申候めてさくのしく

○犬と下僕　與様「善助や犬を外へ連れて往ちの一遍ぐるりと廻はつて運動さしておいで」僕「與様へ申上げまちか彼の犬ちどうしてち私の後まくつ附ゥて參りません」與様「ろれちや善助お前か犬れ後ゴくつ附いておいてナ」

○職業　うるさゥ差出がまちい老耄親爺ゥ年季奉公人れ團居ちて居る中に入り來り「若い衆〳〵若ゥ者はなんても精出〳〵ち下れ方から働いて段々上ゴ經上かるやうゴ心掛ねばならねえぜ」若者の一人一樽ちや私にち

平々凡々ノ子女ノ如キ小言ハ言ヒ慣レテ針ノ如ク天下ノ一ニ

女教師生徒ニ善ヲ導キ返ツテ悲シ陷ルコトヲ傾ケ

出来やせん」老人「なぜ〳〵」若者「私ゐ井戸堀てをのら」

○小兒れ希望　　或る母親か三歳ゑなる元氣れよいおしやべりの童子に向ひ今度赤坊か出来れば男かよいか女かよいのと尋ねたるゑ左の思ひかけなき返答ゑ逢ふて肝と潰ゑたゑとゐふ「お母さん、若しれ母さんの都合がどつちてゑ好ゐのならネ坊ゑ犬子乃方か好ゐヨ」

○女教師と女生徒　　或る高等女學校ゑゑ女教師か生徒に申聞け文章れ妙を悟るゑは是非馬琴乃著書を讀まねばならぬと色々勸むれとも一向ゑ聞入るゝ樣子なゑ或る日其教師か生徒一同ゑ向ひ又例の馬琴論を始めたる時此中ゑ馬琴れ本を讀みたる事れ有る人丈ゐ手とれ擧げなされと云ひたるにこれゑ應しさるゑ唯一人なゑとしう其娘の曰く私ゑ金瓶梅と除けさ、外馬琴の本ゑ皆讀みまーたか金瓶梅丈けは父上か若い女れ讀むものてはいなと申ゑてとうしてゑ讀ませませんと此話の有りさる後未だ一週間ゑ立たざるゐ生徒中一人として馬琴の著書中既く其或る一書丈けゑ通讀せざる者なゑに至ゑたりといふ

或ル一書ニハ暗ニ金瓶梅ヲ指ス

○婦人の赤面　　れ丸さん御機嫌よろゑう、私はネ先刻から半時ばかりゑ貴女と見附けゑうと存して彼方此方さがしましさか一向分かりませなかつたれささうゑるうちゑ子此お召ゑのかちよつと向ふれ方に見えますと昔ゑからよく覺にて居る縞てゑものだのゑろら彼所にれ丸さんか居るさると直さに知れたのてゑに」などいふ挨拶ゑ其婦人れ胸に釘を打つに均ゑさものなり

版權全部

明治廿二年一月六日印刷
明治廿二年一月六日出板

板權所有

定價五拾錢

發行者　愛知縣名古屋區門前町十七番戸　三浦無助
發行者　京都府下京區第四組桝屋町四番戸　出雲寺文治郎
著作者　愛知縣名古屋區常盤町壹番戸　小澤吉行
印刷人　仝縣仝區傳馬町七十番戸　田中有文
大賣捌　東京麻布區飯倉五丁目山口屋　森江佐七
仝　東京々橋區三十間堀　明教社

大賣捌

東京　北畠茂兵衛　伊豫松山　世良藤藏
同　吉田久兵衛　肥前佐賀　河内庄助
同　鴻盟社　大阪　橋本德三郎
同　和泉屋庄二郎　同　中村彌七
同　三倉鐘三郎　越後長岡　目黒十郎
同　伊藤清九郎　同　松田周平
同　河波卯助　同　水原　西村六平
西京　小川多左衛門　信州長野　西澤喜太郎
同　澤田友五郎　羽後米澤　素月晨平
同　永田長左衛門　羽後横手　大澤忠四郎
同　西村七兵衛　美濃岐阜　溝口彌助
同　河合卯之助　三州岡崎　伊藤小文司
同　西村九兵衛　出雲松江　大芦利七
備後尾道　三木半兵衛　肥前佐賀　河内庄助